

Tsukuba

COMMUNICATIONS

Spring

VOL.
23

筑波大学広報誌
ツクコム 2014



対談 スポーツとトレーニング

人間総合科学研究科
体育学専攻 博士前期課程1年
工藤公康 × **白木仁**
体育系教授



- ② 特別対談
市原健一つくば市長×永田恭介学長
- ⑫ 聴 平松祐司 教授
- ⑭ OB&OG 井田寛子 氏
- ⑯ 学内組織紹介 生命科学動物資源センター
- ⑰ 名物先生登場
近藤とも子 養護教諭(附属中学校)
- ⑳ Sports Club 女子サッカー部
- ㉒ Art & Culture
ファッションサークル[RICOCHET]
- ㉔ Homeland イタリア共和国
- ㉖ TOPICS
- ㉚ リレーエッセイ
- ㉜ 茗溪会・紫峰会
- ㉞ 新聞掲載・テレビ放送一覧
- ㉟ イベントカレンダー

～つくば市長と筑波大学長が語る～

「未来の街づくり」 のための パートナーシップ

つくば市長

市原健一氏

学長

× 永田恭介



筑波大生のパワーを つくば市の街づくりに

永田:昨年度は、筑波研究学園都市の建設が閣議決定されてから50周年という節目の年でしたし、筑波大学も開学40周年を迎えたということで、つくば市、筑波大学ともに、記念すべき年でした。市原市長とは、式典などでよくご一緒させていただき、大変お世話になりました。さて、いよいよ平成26年度がスタートし、本学も多くの新生を迎えます。まずは、新生へのメッセージからお願いいたします。

市原:ようこそ、つくばへ。これからの4年間で、筑波大学の素晴らしさだけでなく、つくばの街の良さも実感していただくと確信しています。そして、つくばがよりよい街になるよう、これからの街づくりに

に参加していただきたいと願っています。市内に、経済産業省の「新・がんばる商店街77選」(平成21年公表)にも選ばれた北条商店街がありますが、竜巻で大きなダメージを受けました。災害復興に向けて、筑波大学の先生や学生みなさんが、古民家や古い街並みの再生などに取り組んでくださっています。このように、筑波大学が、つくば市の街づくりに大きな関わりを持ってくれることは、とてもありがたいことだと思っています。特に学生さんにはすごいパワーがありますからね。つくばは、非常に先進的なことが望まれているので、普通ではだめなのです。よその手本になるような、新しい試みをやっていかなくちゃいけない。そのためにも、学生さんたちのパワーをお借りして、さらに斬新な街づくりにチャレンジしていきたいと思っています。

永田:昨年9月には、市長と学生との懇談会を開催していただきました。

市原:はい、昨年初めて開催し、80人ほどの学生さんから、市政への提案や要望を伺ったり、お話ししたりしました。このような機会を、これからもいろいろと設けていきたいですね。それからもうひとつ。つくば市に就職した、筑波大学の卒業生が非常にたくさんいらっしゃいます。平成25年度も事務職を25人新規採用しましたが、ほぼ半数が筑波大の卒業生でした。応募者も半数くらい筑波大生や卒業生なんですけど…。せっかくだから、卒業生の職員たちと在校生が情報交換できる機会が作れたらいいと考えています。

永田:それは、学生だけでなく、保護者の方も望まれていることだと思います。ところで、私もお聞きしたかったし、学生た



ちにも役立つと思うのですが、整形外科医でいらっしゃった市長が、政治家に転身された理由を教えてください。

市原:茨城県議会議員だった父が急逝し、父を支援してくださっていた方々に薦められて、「まあ、ちょっと」ということで始めたのがきっかけです。始めたら後に引けなくなり、続けているうちに、周りの人から押されて市長になりました。きっかけはこのような感じですが、医者も、市長の職も、「自分が人の役に立っている」ということが実感でき、なつてとてもよかったと思いましたね。そのやりがいを支えるに、「私」を捨て、ほとんど「公」という日々をずっと送っています。

研究学園都市 50 周年 筑波大学 40 周年を迎えて

永田:研究学園都市が50周年を迎え、これまでに振り返って、どんな思いでいらっしゃいますか？

市原:研究学園都市が作られた目的というのは、東京の一極集中が激しかったので、その緩和をしようということ。そして、日本の科学技術と高等教育の充実振興を図るということです。今や、研究学園都市は、科学技術の集積で世界的に有名な地域となっていますが、そうした地域を誕生させることを国が50年前に決定したということは、素晴らしいことだと思っています。しかし、その目的が十分達成されたかという点、まだ若干足りないような気もしますが…。

永田:筑波大学も感覚的なものは似て

います。何もないところに研究学園都市を作ったように、何もないところに、歴史のある東京教育大学という前身校を解体して、新しく筑波大学を建てました。どこにもないタイプの新しい日本の大学を作っていきましょうというのが基本でした。すべてのものに対して「開かれた大学」というコンセプトと、絶えることのない改革を続ける「不断の改革」というコンセプトで表されています。この40年間は、この基本的性格を咀嚼するのに使ったようなものだと思います。今、ようやく咀嚼できて、これから自由闊達に、建学の理念を携えて歩いていけるのではないのでしょうか。

市原:つくば市や筑波大学を取り巻く環境はどんどん変化しています。筑波大学ができた頃は、きれいに整備された近代的な街になってきていたけれど、



いち はら けん いち

市原 健一 氏

つくば市長

1951年 つくば市(旧大穂町)生まれ
1979年 北里大学医学部卒業
1993年 茨城県県議会議員(連続4期)
2003年 茨城県監査委員
〃 年 茨城県病院協会会長
2004年 つくば市長

冷たくて、人工的な街というイメージがありました。それから10年、20年と経ち、人間らしい薫りが漂うような、落ち着いた街になってきた感じがします。これからは、さらに一步進めて、「この街はすごく住みやすい、快適だ」と感じられて、いろんな活動ができ、子どもたちがいろいろな教育を受けられる、そういう環境が整った街にしていきたい。そして、そのために科学を活用することが「つくば」らしいと考えています。よそにないような先導的な科学技術の取り組みが、福祉に役立ったり、人間の暮らしを向上させたりする、それを実践する場にしたい。市は、テクノロジーなどのノウハウをあまり持っていないので、筑波大学や研究機関の協力をいただいて、技術的なものや仕組みを一緒になって作り上

げていただきたいと思います。

永田: 研究学園都市50年、本学40年、ようやく、市と本学と周辺の研究機関や企業が力を合わせて、何かを実現する段階になってきた感じですね。本学には、あらゆる分野における基礎研究と、社会に役立てようという応用研究があります。ところが、ここから先がありません。例えば、新しく開発した薬であれば製薬会社、新しいオイルができれば、そういうオイルを製品化する会社が必要ですし、ロボットができれば、町で歩きまわる許可がいる。こうした社会への実装段階には、行政や企業との連携が必要です。研究学園都市の歴史を背負っているつくば市は、研究成果に対して目端が利いていて、共同研究や共同作業がやりやすいように考えていただいているので、ありがたいです。

市原: ここ数年、生活支援ロボットや藻類バイオマスエネルギーなどの実用化を目指す国際戦略総合特区プロジェクトなど、いろいろな取り組みを一緒にやるようになって、つくば市と筑波大学の距離がどんどん縮まっています。これからの50年で、世界の科学技術の振興と、いろいろな課題解決のために、研究学園都市の科学技術が役に立っていくのではないかと期待しています。

永田: つくば市は、サイエンスシティとうたっていますが、さらに前進して、グローバルなサイエンスシティ、世界に冠たる科学都市になっていくでしょう。ただ、持続性のある国際都市を作るためには、世界中からやって来る優れた研究者の生活を、我々がしっかり支えなければならないと思います。話すことや食することだけではなく、医療や子弟の教育まで保証しないと…。こうした、医療の面や地域全体の教育についても、我々は貢献していくつもりです。

市原: 教育といえば、つくば市は今、「教育日本一」への取り組みをやっています。その中で「つくばスタイル科」という新しいカリキュラムを作り、文部科学省に特例で認めていただいて実践していますが、このカリキュラム作りも、筑波大学の先生方に協力していただきました。

2020年東京五輪・パラリンピック開催に向けて

永田: 2020年に、東京オリンピック・パラリンピック開催も決定しましたし、グローバルサイエンスシティを目指すと同時に、スポーツ振興も進めたいところですね。本学は、科学的センスでトップアスリートを育てるという意味では、先導的な大学だと自負しています。柔道、陸上、サッカー…それぞれの競技に科学的な指導力を持った指導者がいますし、世界基準の選手もたくさんいますから、スポーツ振興の面でもさまざまな形で貢献できると考えています。

市原: つくば市では、総合運動公園を作る計画を進めています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの前には完成させて、諸外国のアスリートのトレーニング地として使っていただけるようにと考えています。

永田: つくばは、東京までつくばエクスプレスで45分。諸外国のアスリートたちには、理想的な距離です。ここに長期滞在して、時折コンディションを見極めに東京に出かけて、ゆったりとした自然の中にまた戻って練習すると…。つくば市がそのための環境を整えることに、非常に期待しています。



市原:パラリンピックは、義手や義足、目が見えない方の誘導など、いろいろなテクノロジーが必要な分野です。ここでも、筑波大学に協力していただいて、「テクノロジーによる障がい者スポーツの支援」というコンセプトを入れながら、施設整備をしていきたいと考えています。そういう運動施設ができれば、障がい者の方も、高齢者の方も、市民のみなさんも、一緒にスポーツを楽しむことができる拠点になるでしょう。

永田:パラリンピックも、厚労省管轄から文科省管轄に変わりました。我々の大学にもすぐ期待されている部分がたくさんあります。筑波大学は、視覚特別支援学校などの特別支援学校を5つ持っていますし、障がい科学や、スポーツ医学というような専門分野もあるので、パラリンピックにも、大きな貢献ができると信じています。

チャレンジ精神と 逞しさを兼ね備えて

永田:最後に、筑波大学の学生を含めた、若い世代にエールをお願いいたします。

市原:「本当にこれがやりたい」ということが決まっていて、どんなことがあっても

ただ一直線に突き進むということは、非常に重要なことだと思います。でも、それと同時に、いろんなものにチャレンジするというのもまた重要です。自分が知らないものでも、いろんな可能性があるし、道は開けるものです。ですから、ひとつのものを極めるもののいい、だけど、いろんなものに挑戦し、経験を重ねて自分を磨く、そういうことにもチャレンジしてほしいと思います。そしてその中では、1回や2回の挫折にめげずに、雑草のごとく、踏まれても踏まれてもまた復活する、そういう逞しさを身につけていただきたい。時折、男子学生に、弱々しさを感じる時があるのですが、逞しくなる潜在的な能力は必ず持っていると思います。自分の力を信じて、頑張っていたくださいですね。

永田:今の言葉、本当に、含蓄豊かだと思います。学生は、失敗が許されるのが特権ですから、失敗を恐れずに挑戦して、たとえ失敗しても、それをバネに大きく成長していったほしいものです。本日は、どうもありがとうございました。



なが た きょう すけ
永田 恭介

筑波大学長

1953年	愛知県生まれ
1981年	東京大学薬学研究科博士課程修了
1985年	国立遺伝子研究所分子遺伝子研究系・助手
1999年	東京工業大学生命理工学部・助教授
2001年	筑波大学基礎医学系・教授
2012年	／ 学長特別補佐
2013年	／ 学長





対 談

スポーツとトレーニング

人間総合科学研究科
体育学専攻 博士前期課程1年

体育系教授

工藤公康 × 白木 仁

お手本と言われる 投球フォームは 雑誌の分解写真で

白木：工藤選手とは、20年以上一緒にトレーニングをやってきました。この4月からは、本学の大学院生として、新たな一歩を踏み出されます。

工藤：先生の非常に厳しい指導のおかげで(笑)、長くプレーをすることができました。これからまたよろしく願いいたします。

白木：工藤選手が、夏の甲子園でノーヒットノーランを達成し、西武ライオンズに入団したことは、みんなが知っていると思います。まずは、それ以前の話を話していただけますか？

工藤：野球を始めたのは、小学4年生の秋からです。野球はあまり好きではなかったのですが、父に命じられて、学校の野球部に入りました。父はとても厳しい人で…巨人の星みたいな感じでした。

白木：星一徹みたいなお父さん？

工藤：はい。朝は、早くから起こされて走られるし、夕飯の後は、「シャドーピッチングしてこい」って、家の外に出される。やりたくない野球を、やらなきゃいけないという環境だったので、どうすれば、効率よく上手くなるのかをいつも考えていました。そして、プロ野球の選手が一番いい投げ方をするはずだから、それと同じ投げ方をすればいい、と考えついたのです。

白木：小学4年生で…。

工藤：当時、野球雑誌の裏に、野球選手の分解写真と解説が載っていました。「この人の下半身の使い方が優れている」とか、「肘の使い方がいい」とか。その解説を参考に、誉められているフォームをまねしながら、シャドーピッチングを繰り返しました。この頃に身につけたものが、僕のフォームの原型になっています。

白木：「工藤選手の投球フォームはお手本」と賞賛されていましたが、雑誌の分解写真をまねして作ったというわけですか。効率よくうまくなろうと、野球に対して不真面目だからよかったわけですね？(笑)

工藤：すごく真面目じゃないですか。先生!(笑)。

白木：それで、野球はだんだん好きになっていったのですか？

工藤：実は、小学校の時も中学校の時も野球が嫌で辞めたことがあります。小学校の時は体操部に入りましたが、先生に「早く野球部に帰って来い」と戻られました。中学校に入学した時には、ハンドボール部に入りました。ところが、ハンドボール部と野球部の顧問の先生が一緒で。1年生の秋に、野球部を辞めたという子が出た時、顧問の先生に呼ばれて、「お前ら、明日から部を交換しろ」と。僕は、中学生で初めてのトレードを経験しているのです(笑)。こうして無理やり入らされた野球部ですが、3年生の時にはそこそこ強くなって、県大会に出場するくらいまでにはなりました。

白木：高校は、山崎武司さんやイチローさんなど、たくさんのプロ野球選手を輩出している名門、名古屋電気高等学校(現：愛知工業大学名電高等学校)ですね。

工藤：中学3年の春に、大学・社会人と野球をやっていた方が、用務員さんとして学校に赴任してきました。その方に、中学を卒業したら働くつもりだと話したら、「君くらいのボールを投げるなら、特待生として入れてくれる高校があるよ」と教えてくれたのです。言われた通りに練習に行ったら、投げたら、名電高に特待生で入ることができました。

白木：もしその用務員の人がいなかったら？

工藤：野球を続けていなかったでしょうね。中学を出たら、京都に行って、日本料理かすしの職人になろうと思っていました。

アメリカで学んだ 諦めない心

白木：甲子園で活躍した時には、コントロールのよさと大きなカーブで注目されていました。

工藤：コントロールは、高校2年生までとても悪かった。夏の県大会の準々決勝では、フォアボール、デッドボール、押し出し、ボーク、暴投…ピッチャーがやってはいけないあらゆることをやって、大敗しました。その時に、ある人から、「思い通りの

ところに投げられる距離から投げ始めろ」とアドバイスされて。10mから始めて、ひたすら投げてね、歩幅分ずつ距離を伸ばしていきました。2月頃には、マウンドから、10球中10球、思い通りの球を投げることができるようになったんですよ。

白木：コントロールが良くなって、高校3年生の夏の大会で、甲子園のベスト4になったわけですね。

工藤：ベスト4になった時は、「これで社会人かプロ野球か、とにかく野球で就職できる」と嬉しかったですね。プロに入って、すぐに後悔しましたけど。

白木：逃げ出そうとした？(笑)

工藤：逃げ出せなかったんですけど(笑)、ついてはいけなかったですね。プロって想像以上にすごいところでした。倍くらいの歳の人でもプレーをしていて、スピードも体力も何もかもが全然違いました。

白木：西武ライオンズのトレーニングはどうでしたか？

工藤：広岡達朗監督は、長いシーズンを戦っていくためにはまず体力という考えで、プロに入る前の実績に関わらず、みんなに同じだけ、非常に厳しい練習を課しました。内容は、走りこみや、ファーストのカバーリングとか、セカンドへのスローとか、やろうと思えばできる基本ばかり。100m走を100本とか、バンバン走らされて、投げさせられて。走って壊れて、投げて壊れていくわけです。みんな壊れていって、生き残ったのが、当時の強かった、西武ライオンズの選手たちです。

白木：まさにサバイバルですね。

工藤：広岡監督は、そこに勝てない限り、いくら技術があっても、すぐにケガをする、打てなくなると考えていました。

白木：その時、そういうことを理解していたのですか？

工藤：理解していません。ただ、やらされていました。今は、理解してやる、というのが多いですけど、「やらされる」ことが悪いかというと、そうでもないと思うのです。コーチや監督というのは、先が見えます。「こいつは、こういうことをさせれば、こうなる」というのが見えるから、まずはやらせるわけですよ。やれば、できなかったことができるようになる。体で経験すると、理解できなかったことも、理解できてきます。

白木:今は、合理的に合理的にというトレーニングが主流になっていますが、そうではないトレーニングも必要な時があるということですね。

工藤:若い時は、特にそうですね。トレーニングの考え方は、球団によって全然違うので、入る球団は非常に重要です。僕は、いい球団に入って本当に良かった。先生にお会いして、新しいトレーニングを加えるまでは、ずっと、西武のトレーニングをベースにやってきました。

白木:西武のトレーニングの成果は?

工藤:入団してから3年間の厳しいトレーニングで身に付けたのは、何をしてもし壊れない体です。球が速くなったわけ

でも、コントロールがよくなったわけでもなく、試合で使えるようなもので、よくなったのは何一つないんですよ。ただ、試合でバンバン投げても壊れません、集中力が途切れませんという体になりました。まあ、3年目の途中で二軍に落ち、西武が選手を派遣していたカリフォルニアリーグの1Aに行かされたんですけれどね。

白木:どのくらいの期間行ったのですか?

工藤:1カ月半です。

白木:アメリカから戻って来て、よくなったんですよね?何があったのですか?

工藤:アメリカで学んだのは、環境の違い

と選手の考え方の違いです。日本のチームには寮があって、食事も住むところも提供される上に、一年契約が基本。高卒で入った選手は、だいたい5年は面倒を見てもらえます。だから、心に余裕があるんですけど、その余裕が、自分自身を弱くしている一つの要因なんです。でも、アメリカでは、全部自分の力で生活しなければなりません。そして、ミールマネーといって、日当制です。当時、1日のミールマネーが15ドル。1ドルが230円の時代ですから、日当3000円くらいになります。一人ではとても暮らせないので、7~8人で1つの部屋を借りて生活するのですが、カーテンも何もない、帰って寝るだけの部屋で、寝袋で寝ている選手もいました。

白木:体が休まる環境ではありませんね。

工藤:そんな厳しい生活を送りながら、練習中ずっと、全力を尽くしてプレーをする彼らを見て、それまでの自分の甘さを感じました。それに、そこまでやっても、1週間で首になる人がいるのです。1Aは下位のリーグですから、下位のリーグを1週間で首になるようだったら、生活も厳しいし、プロ野球選手を諦めた方がいいと思うでしょう?でもアメリカの選手はとことんプラス思考で、「たまたまこの1週間調子が悪かっただけで、俺はまたトレーニングして、いつか必ずメジャーで活躍するような選手になる」って真剣に言うんです。そういう考え方に接しているうちに、今までの自分は、「プロのレベルについていけない」とか、「球が遅い」とか、勝手に自分の能力の限界を決めつけてしまっていたことに気がつきました。大切なのは、「諦めない心」なんだと…。

白木:それは大きな意識改革です。

工藤:はい。こんなことを感じてアメリカから帰ってきたら、秋季練習から、宮田征典さんがピッチングコーチで来られたんです。そして、「早い球を投げるには、投げ方がある。指導してもいいが、厳しいぞ」と。他の選手と4~5人で始めましたが、やり遂げたのは、結局僕1人でした。全部の練習が終わってから、そのトレーニングをするので、とてもきついんですね。アメリカで自分の意

「40歳まで続けるなら 付き合うよ、と言いましたね」



しら き ひとし
白木 仁

体育系教授

1957年 北海道生まれ

1979年 筑波大学体育専門学群卒業

1982年 〃 体育研究科体育学修士修了

2008年 〃 体育系教授

オリンピック日本代表選手の専属トレーナーや代表チームのヘッドトレーナーを歴任。

工藤公康選手の他にも、プロゴルファーの片山晋吾選手、村口史子選手や

スピードスケートの清水宏保選手など、多くのトップアスリートのボディーケアも務める。

識が変わってなかったら、僕もやり遂げられなかったかもしれません。春のキャンプに入った時には、球が10^{キロ}速くなっていて、「意外に俺ってすごいな」って思いました(笑)。

白木：それまでのトレーニングで強靱な体ができあがっていたからできた、ということもありますね。その年に、初のタイトルとなる最優秀防御率を獲得して、一躍パ・リーグを代表する左腕になりました。一番良かったのは？

工藤：24～26歳の頃ですね。その後、調子に乗って遊び過ぎて、肝臓がおかしくなりました。成績も低迷し、「工藤も終わりか」と言われたりして。20代後半で結婚したこともあって、それまでの生活を改め、体調管理を気遣うようになりました。

29年間の選手生活を支えたトレーニング

白木：ここまで話を聞いていると、中学校の用務員さんから始めて、ポイントごとにいろいろな人との出会いがありますね。

工藤：本当にそうです。白木先生との出会いも、自分にとって、とても大きなポイントでした。

白木：初めて会ったのは、ハムストリングの肉離れの治療に来た時。29歳でしたね。

工藤：大きなしこりができていました。MRIも撮ってもらって、「けっこうひどいね。でも、この状態のまま放っておいてもだめだから、トレーニングをやろうか」と言われた時は、本当に驚きました。とても痛かったし、静養してマッサージ治療するものだと思っていましたから。でも、半信半疑でトレーニングを始めると、やればやるほどしこりが小さくなって行って、オフが終わった頃には、しこりがなくなっていたのです。「この先生を信じてずっとやってみよう」と、その時思いました。

白木：確か、「40歳までやるんだったら付き合うよ。それじゃなかったらやめた方がいいよ」って言いましたよね。

工藤：僕はそれを聞いて、40歳までやるのだったら、本気でやろうと思いました。トレーニングの本などを見ると、人間

は25歳がピークとか書いてあるじゃないですか。先生に話すと、「そんなことはない」と軽く言われました。トレーニングを繰り返すことで、限界を越えていくことができることを知ったのです。先生のトレーニングは、西武のトレーニングとはまた違う厳しさがありましたね。まずは、歩く足の使い方から始めて、股関節を中心に鍛えるアウフバウというトレーニングを教えていただいたりしました。真冬に、グラウンドに寝て、ただ足を上げたり横に倒したりする運動で、汗をバンバンかくんですよ。40分トレーニングをやって100^{メートル}を3本走る。朝から晩までひたすらやり続け、一日9セットやりました。初めてそれをオフに

やった年は、自己最高の16勝を上げて、最高勝率を獲得しましたが、先生には、「トレーニングは、3年から5年かけてやっていくもの」と言われました。それで、「5年やったら止めていいんですか」と聞いたら、「ずっと続けてください」(笑)。

白木：40歳を過ぎた時に、「先生、40歳までやりましたよ」って言われましたよね。参りました、という感じでした。

工藤：人生の第1、第2コーナーくらいまでは自分で走れますが、第3コーナーくらいまでいったら、尻をたたいてくれる人がいないとなかなか走れません。僕の場合は、先生とうちの嫁が走らせてくれました(笑)。

「40歳まで投げられるなら本気でやろうと思いました」



く どう きみ やす

工藤 公康

人間総合科学研究科 体育学専攻 博士前期課程1年

- 1963年 愛知県生まれ
- 1981年 第63回全国高等学校野球選手権大会でノーヒットノーランを記録(名古屋電気高等学校)
- 1982年 西武ライオンズ入団
- 1995年 福岡ダイエーホークス
- 2000年 読売ジャイアンツ
- 2007年 横浜ベイスターズ
- 2010年 埼玉西武ライオンズ
- 2011年 引退表明
- 2012年 プロ野球担当キャスター、野球解説者
- 2014年 筑波大学 人間総合科学研究科 体育学専攻 入学

白木: 厳しいことを言ったかもしれませんが、工藤選手のプロ意識の高さには、私もずいぶん触発されました。40歳を過ぎてからは、どのようなトレーニングをされていたのですか？

工藤: 若い時には、投げ終わると、夜には体の張りが出ます。30歳を過ぎると、翌日の練習の始まる頃に張ってきました。40歳を過ぎると、翌々日に張ってくるんです。それも、自分で回復させようとしないと、張りが出てこない。投げ終わると、アイシングをしなければならないのですが、終わったら一度体を温めて、軽いトレーニングをして刺激を与えます。そして、翌日に、ジョギングして、キャッチボールをして、軽いウエイトトレーニングをやって、ようやく張ってくるわけです。若い頃は、投げたら、そのまま遊びまくって次の登板を迎え、バーンと投げて完封、という感じでしたが、40歳を過ぎてからは、中6日を細かく分けて、順番にトレーニングし、時間をかけてコンディションを整えていました。

白木: 今、野球解説者として、キャンプ地を回って、いろいろなトレーニングを見る機会があるようですが、若い選手のトレーニングについて、どう思われますか？

工藤: メジャーに行っている選手も、日本にいる選手も、今は、あまり走りませんね。ウエイトトレーニングはやっていますが、持久力や瞬発力など、走ることで身につくものがたくさんあると思うのですが…。

白木: 本学には、科学的トレーニングでオリンピック選手を強化しようというプログラムがたくさんあります。科学的には、20年前に工藤選手に出会った時よりも、かなり進歩してきました。でも、それと共に、走りこんだりして、時間かけて体作りをするというところにもう一度立ち返らないと、オリンピックのメダルをたくさん獲ることはできないのかな、という気がします。

工藤: そうですね。科学が全てではないと思います。でも、科学が重要であることは確かですし、自分で知識を持っていないと、科学を理解することができません。筋肉のことも、関節のことも、野球のメカニクのことも、バイオメカニクス



のことも、先生と一緒にトレーニングをやりながら勉強してきました。それが自信になったところもあるし、自分を変えるきっかけにもなりました。

子どもたちが 楽しく野球できるように

白木: なぜ大学院に入ろうと考えたのですか？

工藤: 引退して3年の間に120回くらい、野球教室を開催しました。すると、「手術しました」って、三角巾で腕を吊って見学している子や、ピッチャーをやっていたけれど、今投げられないから外野をやっているという子など、ケガをしている子どもがとて多いんですね。野球教室では、「肩や肘を一回でもケガしたことがある人？」と聞くようにしているのですが、だーっと手が上がります。半分から、多い時には7割くらい。腰や膝を痛めたことがある子も入れたら、もっといます。ケガをしても、治ってまた野球ができるケガであればまだいいのですが、中には、野球ができなくなるケガや、生活に支障が出てしまうケガをし

てしまう子どももいます。

白木: 小学生が手術をしているのですか？

工藤: 野球をする小学生に多いケガの一つに、離断性骨軟骨炎があります。よく、野球肘と呼ばれるものですね。5～6年生で兆候が出た時に、すぐ検査して半年くらい休めば、治ってまた投げられるようになる子もいます。でも、無理に投げ続けて、中1くらいで発症して、手術している子がたくさんいるのです。そういう子を少しでも減らすために、フォーム的な介入をすとか、トレーニングを見直すとか、自分が何かできないか、と考えたのが、大学院進学のかっけです。

白木: テーマは、野球少年のケガの予防…。

工藤: はい。離断性骨軟骨炎の兆候があった時、お医者さんは、当然、「投げてはいけない」、「試合数や球数が多すぎる」と指導します。僕もそれが正しいと思いますよ。でも、監督やコーチの立場を考えると、投げさせないわけにはいかないこともわかります。技術を身につけるには、球数を投げなきゃいけない。たく



さん試合で投げて、経験値を増やさないと、野球が上手にならない。だから、監督やコーチにも理解してもらえ、お医者さんたちも、これだったらやってもいい、と言ってもらえるようなものを、なにか1つでもいいから作りたいのです。「どうすれば、子どものケガを減らすことができるのか」という自分の疑問の答えを見つけると同時に、何かそれが子どもたちの役に立ってくれるように、勉強したり研究したりしたいと思います。

白木: お医者さんと、監督・コーチをつなぐ研究。これは、工藤選手にしかできないかもしれませんね。いい情報をきちんと与えて、子どもたちが楽しく野球ができるようになるといいですね。工藤選手は、子どもの頃、ケガはしなかったのですか？

工藤: 僕は、小学校、中学校でバンバン投げていましたが、幸い大きなケガや故障はありませんでした。懸垂をやったり、腕立てをやったり、登り棒を登ったりして、腕を鍛えていたのがよかったのかもしれないし、体操やバスケ、サッカーなど、いろんなスポーツをやっていたのがよかった

のかもしれません。

白木: そういうご自身の経験も含めて、これから研究していって下さい。筑波大学には、さまざまな分野の先生がいるし、留学生を含めて学生もいろいろいるので、たくさんの刺激を受けて学生生活を送ってもらいたいと思います。野球だけでなく、全ての種目に通じる、子どもたちの重要なトレーニングみたいな内容になるような気がして、とても楽しみです。それでは、最後に、本学の学生を含めた若い世代に向けて、メッセージをお願いします。

工藤: 先程もお話しましたが、アメリカで学んだ「諦めない心」が、僕の座右の銘です。「諦めない心」といえば、4月には、陸前高田市の旧小友中学校跡地に、僕と幾つかの企業が寄付をして作った、「あきらめない心スタジアム」が完成します。

白木: 素晴らしいプロジェクトですね。

工藤: 子どもたちにも、「諦めない心」を持ってもらいたいという気持ちを込めて名付けました。日本人は、「壁」とか、「壁にぶち当たった」とよくいいますが、

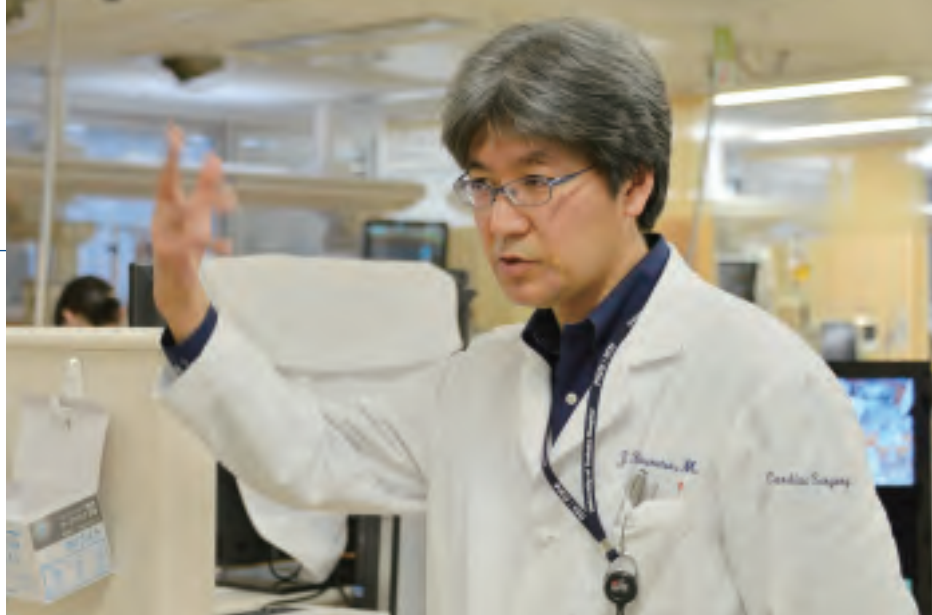
「壁」は、他人が作ったものではなく、自分が勝手に作ったものです。「壁」という言い方をすると、自分の能力の限界を決めつけて、諦めることにつながるので、「壁はない」というところから始めてほしいです。誰でもみんな、すごい能力を持っているんですよ。つまづいたら、転んだって、「壁」を作らなければ、前に進むことができます。「諦めない心」があれば、不可能はない。白木先生から教えていただいたことです。

白木: 本日はありがとうございました。これからがんばってくださいね。



ひら まつ ゆう じ
平松 祐司 教授(医学医療系)

1961年 愛知県生まれ
1980年 愛知県立時習館高等学校卒業
1986年 筑波大学医学専門学群卒業
1992年 〃 附属病院心臓血管外科レジデント修了
1994年 米国ペンシルバニア大学胸部外科研究員
1998年 筑波大学臨床医学系(呼吸器・循環器外科)講師
2001年 米国フィラデルフィア小児病院心臓外科研修
2006年 筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授
2010年 ベトナム、チョーライ病院での心臓外科技術指導開始
2011年 筑波大学医学医療系外科学(循環器)准教授
2013年 同教授、附属病院小児集中治療センター副部長



それがプロの仕事をして120%果たして初めて、一つの治療が成功するのです。

治療の舞台となったのは筑波大学附属病院の小児ICU(小児救命救急センター)。未来ある子どもたちを救う重要な施設ですが、病院ビジネスの面ではコストパフォーマンスが悪く、全国的にも整備は進んでいません。そんな中で厚生労働省との交渉や院内の調整に奔走し、2013年1月に開設されました。国内で8ヶ所しかないうちの、一番新しい施設です。

このセンターは高度救命救急医療に特化しており、他の病院では治療ができない重篤な小児患者を扱います。ですから受け入れの要請は絶対に断りません。すべての科がいつでも対応できるよう待機しています。8つのベッドはほぼ常に満床。これからの医療を担う若い人たちにとっては、命を救う先頭にたつ自覚とモチベーションを培う魅力的なユニットです。

「ノブレス・オブリージュ」の心で

医療には、知識や技術・設備だけでなく、コミュニケーションも不可欠です。特に小児ICUでは、短時間で患者の両親との信頼関係を築かなくてはなりません。うまくいくとは限らない手術に同意するか、治療法の選択肢がほとんどない状況で判断を迫られる両親には、医学的な細かい説明よりも、その手術が子どもにとつてどれほど重要か、そして、何としても助ける、という医師の誠実で強い気持ちが頼りです。

もちろん、小さな体に傷をつけるためらいや、自分の患者が命を落とすようなことは避

けたいという思いはあります。その葛藤やプレッシャーを乗り越え、患者に対して最善を尽くす高い志とリスクを負う覚悟を持つ。それがプロフェッショナルたる医師が果たすべき責務「ノブレス・オブリージュ」の精神であり、患者やチームの信頼を得る第歩なのです。

一番遠いところを目指す

外科は患者の体に最も直接的なアプローチをする医療です。その中でも心臓外科の道を選んだのは、一番難しそうに見えたから。心臓はまさしく命にかかわる臓器で、病気の症状もさまざま、治療のテクニックや道具も多彩なうえ、複雑な思考プロセスや判断力が求められます。最初はとても無理だと思いましたが、だからこそ自分にとって一番遠いところへ行ってみようかと決心しました。

小児専門の心臓外科はさらに難しい分野です。成人とは違い、先天性の疾患を扱うため手術のバリエーションも多く、どれもが初めてのケースのようなもの。それを、多い時には一度に4〜5人の患者を担当し、それぞれの治療方針や経過のことを常に案じ、手術の前にはイメージトレーニングを繰り返します。過去の症例や経験に基づいた判断でも、それで正しいのか、毎日が緊張の連続です。それだけに、命を救う達成感は何にも代え難いものがあります。

大学は教育の場ですが、実際の医療は教科書通りにはいきません。医療現場での自らの姿を通してしか伝えられないこともあります。医師としての地道な仕事。一度に二人しか助けることができないもどかしさも感じつつ、それでも、医学生にとつての目指す姿、越えたいと思える存在でありたい、その願いを秘めてさらに遠くへ歩み続けます。



聴

平松 祐司 教授（医学医療系）

小さな命をひとつひとつ救う

医療の最前線を支える大きな信頼と判断力

昨年5月、体重わずか1100gで生まれたその赤ちゃんの心臓には、直径1cmほどの穴が開いていました。半年以上に及ぶ治療の間、2度の手術と24時間体制のケアにより、奇跡的にその命を救ったのが筑波大学附属病院小児ICUの医療チームです。これほどの小さな赤ちゃんに対する心臓手術は世界的にも稀で、難しい判断の連続でした。この手術を執刀し、チームを率いた医学医療系の平松祐司教授。小児心臓血管外科医として、今日も小さな命と向き合っています。

前例のないケースに挑む

生まれつき心臓の右心室と左心室の間の壁に穴が開いている病気（心室中隔欠損）は珍しいものではありません。通常は生後、体重3〜4kgに成長するのを待って手術を行います。このケースでは1kgほどの極小未熟児で生まれ、その直後から命にかかわる状態に陥りました。かつてない低体重の手術ですが、すぐに処置しなければ手遅れになることは明らか。決断はひとつしか残されていませんでした。

しかし、あまりに小さな赤ちゃんです。心臓の大きさはウズラの卵ほど。さすがに直接メスを入れるのは困難でした。そこで最初に行ったのが肺動脈にテープを巻いて肺への血流を絞る手術です。手技自体は、一般的なものですが、太さ数ミリの血管、しかも周りにほとんどスペースのないところへテープを回すのは至難の業。ちよつとでも傷をつけたらアウトで1mmの誤差も許されない、そんな緊迫した作業でした。

4か月後、3kg弱にまで成長した段階で2度目の手術を行いました。今度は心臓の

穴を直接ふさぎます。人工素材でできたパッチをあて、周囲を糸で縫い付けていきます。手芸と同じ要領ですが、やり直しはききません。ひと針ひと針が真剣勝負。それを15〜30分ほどで終わらせる手際のよさも必要です。

手術は成功したものの、容態は安定しませんでした。その日のうちに心臓が止まってしまい、心臓マッサージと補助循環装置で6日間、なんとか命をつなぐことができたのです。その後は徐々に回復に転じ、3か月後には元気に退院していききました。振り返ると、奇跡がいくつも重なったようなケースでした。

チーム力が発揮される小児ICU

このような治療は外科だけではできません。生まれたばかりの赤ちゃんを最初に助けるのは新生児科です。点滴を入れたり、人工呼吸の管を通したり、それを新生児用のカプセルの中で行います。まさにボトルシップ細工のような繊細な作業です。それから外科医の出番。手術室には、執刀医の他に麻酔科医、人工心肺などの機器の技師、看護師、アシスタント、最低でも7〜8人のチームが必要です。術後のケアも含め、それ



第一学群自然科学類を卒業し、NHKニュースウオッチ9の気象キャスターとして活躍中の井田寛子さん。才色兼備の「リケジョの星」として憧れの存在ですが、その道のりは、決して平坦なものではありませんでした。

— まず、筑波大学を選んだ理由から教えてください。

小さい頃から自然や生物が好きで、獣医学部のある大学を受けたのですが、それがだめだったので、生物や科学を学ぼうと、筑波大学第一学群自然科学類に進学しました。都心にある大学より、自然豊かなところにある大学がいいなという思いもありました。

— 陸上の同好会に所属されていたそうですね。

トラックを走るというより、自然の中でいろいろな景色を見ながら走るのが好きで入りました。つくばはすごくいい環境で、あちこちをいっぱい走りましたね。大学4年生の時には、同好会のみんなと、つくばマラソンに出場しました。フルマラソンを走ったのはそれが始めて。30^{キロ}までは、まあまあ調子よかったのですが、足が痛くなるし、それからが大変でした。今でも、公園を走ってリフレッシュしたり、ハーフマラソンなどの市民大会に出たりしています。

— 昨年の夏には、本学で、女子中高生対象に、「リケジョになろう」というテーマで講演していただきました。大学ではどのようなことを研究されていたのですか？

宇宙科学研究室で、土や石の分析をしていました。地学、生物、化学が入り混じった分野で、ちょっとさかのぼった時代の生き物を探るというような感じです。院生の先輩は、隕石を分析したりしていましたが、私は、東京湾の土の分析で終わってしまいました。理系は難しい、堅いというイメージがあるようですが、そんなことはありません。「リケジョ」がどんどん増えていくといいなと思っています。

— 大学院で研究を続けようとは思わなかったのですか？

研究者として科学を追求するというよりは、科学を多くの人たちに広めたいと思いました。科学番組や動物番組が好きで、よく観ていたので、「テレビ局に入って、自然に関わる番組がやりたい」と考えたのです。

— テレビ局を志望して、どのような就職活動をされたのでしょうか。

つくばにいと他大の学生と交流がな

井田 寛子さん

「NHKニュースウオッチ9」気象キャスター
気象予報士

1978年 埼玉県生まれ
2001年 筑波大学 第一学群自然科学類 卒業 製薬会社に入社
2002年 NHK静岡放送局 入局 キャスター・リポーター
2006年 気象予報士試験に合格
2008年 大阪放送局でキャスター・気象予報士
2011年 「NHKニュースウオッチ9」気象キャスター

く、情報も集まらないということもあって、3年生から、新宿のアナウンススクールに通いました。就職活動では、東京、大阪、名古屋などの主要なテレビ局と、静岡テレビなど関東に近い地方局を受験。自然の番組に携わりたかったので、アナウンサーだけでなく、制作や記者、ディレクターの採用試験も受けたのですが、全く引っかけませんでしたね。地方の局で、最後の方まで残っていたところはありませんが…。そこがダメだったときは本当につらくて、研究室の中で泣いて、仲間にも慰めてもらいました。その時の悔しさと「もう終わりだ」という絶望感は、今でも覚えています。

— つらい時期があったのです。そして、卒業後は製薬会社に就職されました。

最初、マスコミ以外は考えたくないと思ったのですが、「早く社会に出ないといけない」という自分の気持ちや親の願いがありまして…。「何か強みがないからテレビ局に合格しない」ということもあったので、製薬会社は自分の強い科学の部分で育てていくにはいいかなと選びました。就職前も後も、ずっと「いつかはテレビ局に行く」と心に秘めていましたね。就職した年の冬には、NHK静岡放送局のキャスターに採用されました。

— 念願のキャスターになられて、どうでしたか？

静岡では、キャスター・リポーターとして、いろんなところに行って取材をしました。最初は無我夢中でし、伝えることがすごく楽しかったです。でも、2年くらい経った時に「私は自然に関わる仕事がしたかったはず」と初心を思い出しまして。気象予報士の資格を取れば、希望するような仕事ができるようになるのではないかと考えて、勉強を始めました。静岡にいううちに、災害報道に関心を持つようになったというのがありますね。静岡は、地震に対する意識も高かったし、東日本の中で特に台風が通りやすい場所で、台風報道にも力を入れていました。地震も台風も、自分の関心がある「自然」がもたらすものなので、災害報道に携わりたいと考えるようになりました。

— 気象予報士の試験は難しかったですか？

量も多いですし、数式とか物理の式を1から見直したり…仕事の合間にやらなければならないということで、うまく勉強が進まず、5回目の挑戦でようやく合格しました。嫌になることはありましたが、「自分の夢を実現させるには、絶対に必要なもの」と思っていたので、挑戦をやめようとは思いませんでした。

— ニュースウォッチ9では、気象キャスターとして、9時40分頃から、季節や気象に関わる映像の紹介と天気予報をされています。

テレビに映るのは4分半くらいですが、裏の作業はたくさんあります。通常は、午後1時半くらいに出社して、まず、天気図などの資料から、気象状況を1時間くらいかけて解析します。それから、その日の方針を決め、「こういうVTRを探してきてください」というようなオーダーを、番組のディレクターに伝えます。映像素材が集まったら、どれをどう使って制作するかを決め、下絵を書き、発注します。その日のことを夜に伝える、というところに意味があるので、当日の映像しか使いません。遠くにロケに出た時にも、午後には戻って制作に取りかかります。

— 大変なお仕事ですが、やりがいがありそうですね。

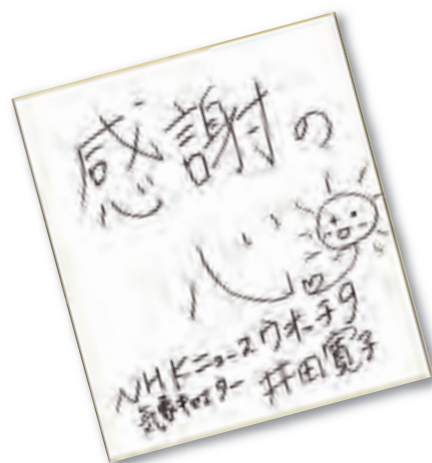
自分のやりたいことがなかなかできずに、自信をなくしたり、「今やっていることは役に立つのか」と不安に思ったりしたこともありました。やっと今、「自分が好きな自然に関わりながら、自分というものを持っていて生きている」という感じがしています。

— 2月には、観測史上初というような大雪が度々あり、甚大な被害がありました。気象予報と災害について、どのようにお考えですか？

近年、経験のある先輩方でさえも見通しが立てられないくらい、予想を越えるような雨や雪の被害が起こっています。災害の被害を減らすため、正確で的確な情報を、速やかに受け取ってもらおうよう、あらゆる努力をしないといけないと思っています。予想降雨量は何ミリ、といっても人に伝わらないので、過去の映像を使ったり、ちょっと強めに声かけをしたり、危険をイメージし、危機感を持ってもらう伝え方を工夫していますが、本当に難しいです。

— 最後に、学生たちに向けて就活のアドバイスをお願いします。

今の学生さんには、「やりたいことが見つからず、いろいろな会社を受けてみる」という人が多い感じがします。それもいいのかもしれませんが、やりたいことを決めて、そこに向けて努力すれば、絶対、何らかの形でそれに携われるようになれると思います。私は、最初から気象予報士になりたかったわけではありません。最初は獣医で、次が科学番組で、最終的には気象キャスターというように、変化しています。でも、常に、「自然が好き」というのが根本にあります。誰でも好きなものはあるでしょうから、自分の好きなものを軸に、それをどう具体的にしていくかを考えれば、自分のやりたい仕事が見えてくるのではないのでしょうか。



つくばキャンパスは、東西約1km、南北約4kmの自然に恵まれた広大なキャンパスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・研究組織がありますが、全てを知ることはなかなかできません。その組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。

生命科学動物資源センター

Laboratory Animal Resource Center

Introduce

医学や生命科学の進歩に欠かせない動物実験。最近では遺伝子ベースの研究が主流となっており、さまざまな遺伝子改変マウスが使われています。生命科学動物資源センターは、全国や海外の幅広い研究ニーズに応える遺伝子改変マウスを作製・供給するとともに、遺伝子操作や解析技術の研究開発を通して、動物実験の基盤を築いています。



高橋 智 センター長



日本最大のマウス供給基地

生命科学動物資源センターの前身、動物実験センターが設立されたのは1976年、筑波大学開学から間もなくのことです。学内で動物実験を行うための適正な環境や方法を確立することを目的に発足しました。

がんや成人病、アレルギーなどの疾患や、脳のしくみの探究など、動物実験によって発展してきた研究領域は数多くあります。1990年代に入ると遺伝子ベースの研究が主流になり、実験対象は犬などの比較的大型の動物からマウスへと変わりました。動物実験センターでは、学内向けに、さまざまな病気を発現させたり、特定の遺伝子の機能を無効化したマウスを作製していましたが、こういった実験用マウスに対する全国的なニーズの高まりを受け、2001年に生命科学動物資源センターとして改組、国内外の研究機関に向けて遺伝子改変マウスを作製・供

給する拠点へと生まれ変わりました。

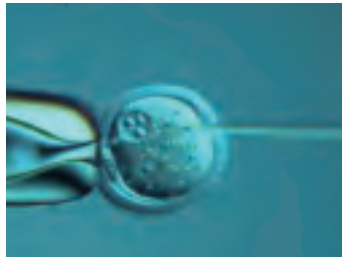
現在では、最大1万ケージ(5万匹)のマウスを飼育し、年間80系統にもおよぶ遺伝子改変マウスを扱う、国内最大規模の施設となっています。また、医学の臨床トレーニングや術式開発、人工骨の実験などに用いる、サル・犬・豚・ウサギなどの動物もたくさん飼われています。毎日200人ほどの研究者や学生が訪れ、年間で400件近い動物実験が行われる、学内で最も活発に利用されているセンターの一つでもあります。

トップレベルの技術力を誇る

動物実験にマウスが使われる大きな理由には、約2万個ある遺伝子の一次配列(塩基の並び方)がしっかりとわかってことが挙げられます。また、近交系といって遺伝的に均一な個体を作ることができ、同一系統の中でどの

個体を使っても同じ実験結果が得られるという利点があります。およそ2年半という寿命も、実験には適した性質。わずか20gほどの小さな動物ですが、実験ツールとして計り知れないパワーを秘めています。

そのパワーを効率よく引き出す技術力の高さが生命科学動物資源センターの「売り」です。遺伝子改変のプロセスは機械化が進んでいますが、肝心の、受精卵に遺伝子を注入する操作だけは人の手が頼りです。筑波大学での遺伝子改変マウスを使った研究は国内でもかなり早くから始まっており、その間に培われ、受け継がれてきた技術やスキルがこの手作業にも活かされています。ひとつの系統を作製するのに約300個の受精卵が使われ、そのうち正常に生まれるのが100匹程度、その中で目的の遺伝子改変が行われたマウスは5～20匹ほど。「1日に数百もの卵をひとつずつ素早く確実に操作する、このトップ



レベルの技術力が、マウスの供給能力と品質管理に反映されています」(高橋智生命科学動物資源センター長)。

マウス、宇宙へ旅立つ

遺伝子改変マウスの作製はいろいろなどで行われていますが、それ自体がメインの研究テーマになることはありません。生命科学動物資源センターでは、資源開発・資源管理・資源解析の3分野を設け、マウスの作製・供給だけでなく、細胞分化の機構解明や突然変異の解析、イメージングによる解析技術の開発など、遺伝子改変や実験動物に関する独自の研究活動にも精力的に取り組んでいます。

中でもユニークなのが、宇宙でマウスを飼う実験です。国際宇宙ステーション内の実験棟「きぼう」で実施する重点課題の実験テーマに採択され、2016年に12匹のマウスを初めて宇宙へ送る

ことになっています。将来、より多くの人が宇宙に長期滞在するようになったときに、宇宙環境下での生活によって体に生じる影響を調べるため、宇宙で30日間過ごした後の細胞や遺伝子の変化を観察する予定です。また、骨粗しょう症や筋肉の異常などの病気の研究にも役立つと期待されます。

世界展開を目指して

遺伝子改変技術には、ごく最近、大きなブレイクスルーがありました。CRISPR-Cas9という、遺伝子配列の特定部分を切断する酵素の登場です。従来の遺伝子改変には、受精卵への遺伝子導入、スクリーニング、交配といったステップが必要でしたが、この酵素を用いると受精卵だけで自在な改変が可能です。ある遺伝子が機能するかしないかだけでなく、その機能のわずかな違いが病気を引き起こす例は意外と

多く、この新しい方法によって、そのような遺伝子改変もそれほど困難ではなくなると期待されています。しかしこの技術を使いこなすことのできる施設はまだ多くはありません。生命科学動物資源センターではすでに、依頼の半分以上に対してこの方法を適用しており、そういった意味では、ここでしか作製できないマウスは数限りなく存在します。

センターの優れた技術力は世界的にも評価され、イギリスや韓国をはじめとする海外の研究機関からも、遺伝子改変マウス作製の依頼が来るようになってきました。高橋センター長は、「今後は海外へのマウス提供を積極的に展開し、提供先の研究機関との共同研究も広げていきたい」と抱負を語っています。実験ツールとしての遺伝子改変マウスは、研究上の共有財産とも言うべきもの。生命科学動物資源センターで生まれたマウスたちが、世界中でさまざまな研究を支えています。

附属学校の 名物先生登場！ 13

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。



今回の先生

こん どう こ
近藤とも子 養護教諭

筑波大学附属中学校

Profile

秋田市出身。筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。秋田県立高等学校(3年)東京都豊島区池袋保健所(2年)を経て、1984年4月筑波大学附属中学校に養護教諭として着任。2011年学校保健功労者として文部科学大臣より表彰される。

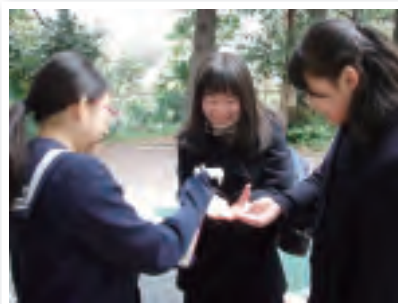
とにかくにぎやかな保健室だ。生徒や職員がひっきりなしに出入りする。ケガや体調不良だけではない。保健委員会の活動拠点として、ミーティングなども行われる。この日は週に1度の保健委員会。各クラスに2人ずついる保健委員が集まってきた。

議題は「総合健康診断について」。委員会の三役である2年生を中心に、今回の健診のテーマ「睡眠と発育」に関するプレゼン内容を話し合い、健診の運営にあたる役割分担を手際よく決めていく。近藤先生はその様子を黙って見守るだけ。会議は30分ほどで終了した。

健診のテーマ、と聞いてもピンとこないかもしれないが、保健委員会では健診のたびにテーマを設定している。そのテーマに沿って、全校生徒に向けて健康に対する啓発プレゼンをする。身近な話題や情報を盛り込んだ寸劇など工夫を凝らした力作が毎回披露される。実は、学校での健康診断は筑波大学附属小学校が発祥の地。そのつながりで、附属中学校でも健康診断には力を入れている。一般的な健診項目から外れた、胸囲のデータを今も蓄積し続け、視力をより正確に判定できる従来の方法を採用している。

近藤先生が赴任したころの附属中学校は、ケガ人がとても多かった。特に運動会。全校生徒600人ほどのうち、ケガ人が200人近く出たこともある。ムカデ競争のような集団参加型の種目をたくさん取り入れていたため、一人が転ぶと連鎖的に大勢がケガをすることになるわけだ。勝敗にこだわる校風の表れで





昇降口でのインフルエンザ予防活動



手洗いの励行

もあるが、それで済ますにはあまりにも多い。そこで、なんとかケガを予防することはできないか考え始めた。

これが現在の保健委員会の原点となった。保健委員会自体はその前からあったが、生徒たちが主体的な活動を広げていったのは15年ほど前から。膝にサポーターを装着、長いソックス着用、入念な準備運動の呼びかけなど、自分たちにできるケガ対策を次々と考案し、全校に提案するようになった。それが発展して、今では「健康・安全」の側面から学校生活のさまざまな場面に関わっている。日常的に行う校内の安全点検といった地道な活動はもちろんのこと、宿泊行事や学芸発表会などの年間行事でも重要な役割を果たす。

保健委員会に対する近藤先生のユニークな試みのひとつが「ピアサポート」という考え方だ。ピアサポートとは、仲間同士が互いに支えあうこと。スクールカウ

ンセラーの先生とも協力して、サポートスキルを学んだり、簡単な傷の手当、急病人の扱い方などの研修を行う。先生が不在の時でも、生徒同士である程度対応ができるようにするためだ。こういったことを学ぶ機会は大人でも多くはないし、いったん身につけたスキルは一生もの。保健委員会というサービス業的な感もあるが、保健委員としての経験が自分自身にもプラスであるという実感を与えている。また、保健委員を通じて全校生徒にも健康安全意識が還元され、効果的な学校保健活動のサイクルが回っている。

生徒たちが保健委員になろうと思ったきっかけはさまざま。みんなと親しくなりたい、人のためになりたい、自分にできることを探したい、などそれぞれの思いがある。委員会活動の中で、互いの意見を尊重することを学び、何かを成し遂げる達成感を得て、楽しみながら成長する。中学生活の3年間、ずっと保健委員を務める生徒も多い。さらに、先輩が後輩を育てるという伝統も生きている。委員会の後には2年生と3年生の新旧三役が反省会を開き、その日の会議の進行について振り返る。

自分で考え行動する、これが保健委員会のベースライン。先生は課題を投げかけるが、大きく脱線しない限り、その先は生徒たちに任せている。ただし、要所

はきっちり押さえる。会議の前には委員会三役と、議論の進め方についての周知な打ち合わせをし、普段からこまめに声をかけることも忘れない。だからこそ、生徒も自信を持って活動が続けられる。

多くの学校では、頻繁に保健室を利用する生徒でなければ、養護教諭の顔や名前も知らずに卒業してしまうことだろう。しかしここでは近藤先生を知らない生徒はいない。入学時のオリエンテーションや、健康教育の授業などで、学年指導を行うためだ。

養護教諭は一人で全校生徒を受け持つようなもの。教科を教える先生とは異なる役割が求められる。些細なことで保健室へ通う生徒もいれば、在学中に1度も来ない生徒もいるが、保健室へ来るというのは自分の体のことを意識するベストチャンス。そのときに生徒の状態をよく観察し、考えるきっかけを与えられるように、それぞれに合ったコミュニケーションを図る。そのためには担任の先生との情報交換も欠かせない。にぎやかな保健室にはそういう意味も隠されている。

「自分に何ができるかを考え、積極的に参加し、関与するほど楽しめます。健康診断を楽しみましょう」。保健委員会の締めくくりに近藤先生から生徒たちへ贈られたコメントに、保健教育の極意がありそうだ。



金子 丈夫 副校長

1984年4月着任の近藤とも子先生は、当初、生徒保健委員会が委員長等三役を中心に組織的に活動をしていることに驚いたという。その活動をバージョンアップするべく、「楽しんで活動できる委員会を目指したいと思った」と当時を振り返って語ってくれました。そのために活動の核ともいえる保健委員会委員長、副委員長、会計からなる「三役会合」における生徒の意見を丸ごと受け止めていきました。「三役が楽し

く活動していれば保健委員30人も楽しく活動できる。その姿を見れば・・・」それ以来、生徒自らが考え、行動する委員会に育っていき、今や学校保健活動の一翼を担っています。2011年8月には学校保健功労者として文部科学大臣に表彰され、今も足取り軽く、優しく楽しく、時に厳しく、生徒に接しています。



「日本一長いミーティング」で掴んだ全国2位!

その日、応援スタンドはフューチャープルーに染まり、男子蹴球部の力強い応援が冬の空に響き渡った。全日本女子サッカー選手権(インカレ)決勝。大学勢で唯一なでこリーグに参戦している吉備国際大学を相手に、1対1の同点で90分間を戦い抜く。延長戦で1点を奪われ、惜しくも日本一を逃したものの、創部以来初の準優勝という快挙を成し遂げたのだった。

同部には、高校選手権で活躍していたような選手はほとんどいな

い。大学でサッカーを始めた選手もいる。「準優勝という結果には、周りはもちろん、選手たちも驚いている。しかし、そうなるだけの努力は間違いなくしてきた」と、決勝戦までの2年間、監督を務めた三輪由衣さんは断言する。

他の強豪校に比べて、個々の選手の身体能力が低いことも、サッカーの技術がないことも全てを受け入れて、その上で、「絶対にインカレで優勝する」という強い信念を持ち、どうやったら勝てるか、何をすればよいかを、4年生8人を中心に必死で考え続けてきた。

練習時間は1日2時間。時間は短い、どの大学にも負けない練習量といえるものの、中身の濃い練習をこなした。

しかし、それだけでは、インカレまでに、自分たちの成長が間に合わない。その成長を補い、「チーム力」で戦うために行ったのが、「日本一長いと思う」という徹底したミーティングだ。試合の都度、スタッフと4年生全員で、ビデオを観ながらのゲーム分析に5～6時間かけた。ゲーム分析以外にも、事あるごとに時間を見つけては話し合い、強い絆や諦めない強い気持ちを育てていった。そして、それ

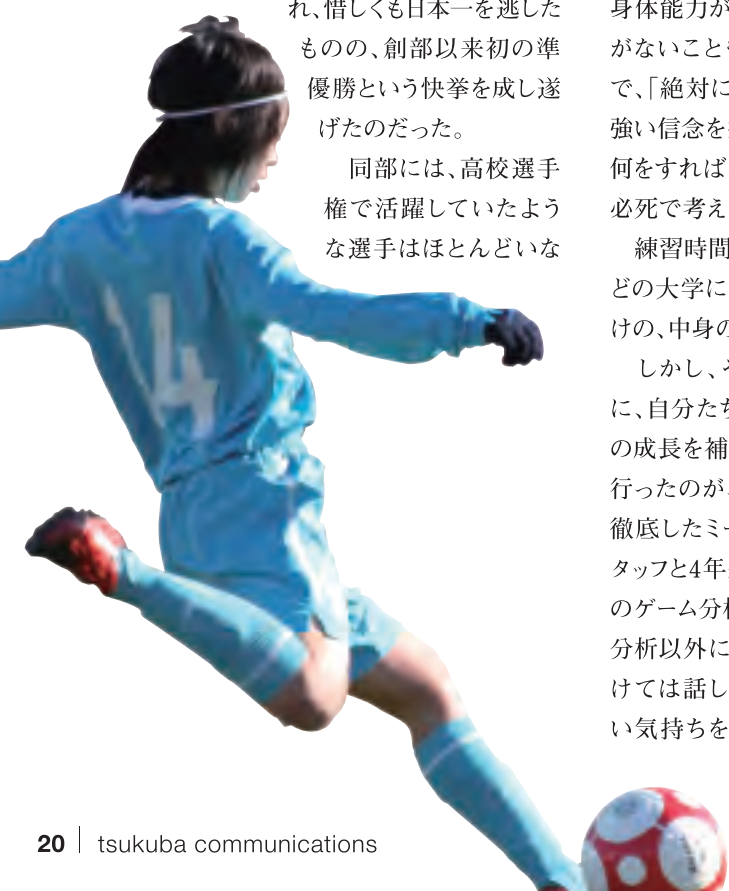
は、「全員で最後の最後まで体を張って守り抜く」という粘り強さ、苦しい戦いに競り勝つ力となって実を結んだのだ。

新井佑夏里新キャプテン(体育専門学群3年)は、「全然勝てない時期があって、関東大学女子リーグ6位で進んだインカレだった。でも、どんな時も4年生たちは、『日本一になる』という芯がぶれなかった。インカレ2戦目は、リーグ戦で6失点の大敗をした関東学園大学と対戦。その時でさえ、『勝てる』と信じている4年生がいたから、私たち後輩もついていくことができた」と振り返った。

2014年度のシーズンに挑むメンバーは28人。スローガンは「全てはその一瞬のために」。「その一瞬」とは、決勝戦の舞台に立てたという感動の一瞬でもあれば、負けた悔しさの一瞬でもある。一人一人がそれぞれの「一瞬」のために、筑波らしく努力し続ければ、今回は惜しくも届かなかった、日本一という目標に繋がるという思いがこめられている。

「つくばフェスティバル」

女子サッカー部には、インカレ優勝の他に、2つのミッションがある。「人間的成





長」と「地域貢献」だ。それらのミッションを達成するための活動として、大きな役割を担っているのが、つくば市内の女子小学生にサッカーを指導する「少女サッカー教室」や「全国大学女子サッカーつくばフェスティバル」の開催だ。

「つくばフェスティバル」は、毎年夏に、全国から20以上の大学を集め、3日間かけて開催する大きなイベント。3年生が中心となり、半年以上前から計画を開始して、経理から、広報、協賛、ホテルの割り振りなど、大会の企画・運営を全て行うため、大変だが、とても貴重な人生経験となる。

このイベントは、女子サッカー部を立ち上げた小林美由紀さん(同部アドバイザー、ジェフレディースU-18コーチ)が、女子大学サッカーの普及を目指して企画したのが始まりで、前回で21回目の開催。女子サッカーの裾野を広げるため、11人制の「一般リーグ」だけでなく、8人制の「チャレンジリーグ」を開催し、人数が揃わないチームでも参加しやすいよう工夫している。

準優勝して、周囲の目も環境も変わるかもしれない。それでも、初心者を含む、いろんな人を受け入れながら、全員で戦うチームを作るというスタンスや、地域貢献に力を尽くし、各自の人間の成長を目指す姿勢は、これからもしっかりと変わらない。



Information

前身の師範学校から140年を超える歴史を有し、オリンピックの金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】 <http://www.sports.tsukuba.ac.jp/>
【筑波大学体育会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

女子サッカー部

■ 全日本大学女子サッカー選手権 準優勝

柔道部

■ 柔道グランドスラム・パリ
【男子81kg級】第3位 永瀬貴規(体育2年)

皇后杯全日本女子柔道選手権大会 4/20 横浜市文化体育館
全日本柔道選手権大会 4/29 日本武道館
関東学生柔道優勝大会 5/25 埼玉県立武道館
全日本学生柔道優勝大会 6/28.29 日本武道館

水泳部

■ 第55回日本選手権(25m)水泳競技大会
【男子100m背泳ぎ】優勝 金子雅紀(体育4年)
【男子200m背泳ぎ】優勝 金子雅紀 日本短水路新記録
【男子50m平泳ぎ】第3位 林 佑樹(体育4年)
【男子50mバタフライ】第3位 佐藤智俊(体育4年)
【女子50m背泳ぎ】第2位 諸貴瑛美(体育3年)
【女子100m背泳ぎ】第2位 諸貴瑛美
【女子50m平泳ぎ】優勝 小林明日香(体育3年)

■ 第37回関東学生冬期公認記録会
【男子200mメドレーリレー】
金子雅紀・林佑樹・佐藤智俊・鏡味卓也(体育3年) 日本短水路新記録

スキー部

■ 札幌国際スキーマラソン
【25kgの部】第3位 宇久村苗実(人間学群1年) 1時間50分

バレーボール部

2014年春季関東大学バレーボールリーグ戦
4/12～5/25 東海大学湘南キャンパス総合体育館 他

アメリカンフットボール部

関東学生アメリカンフットボール春季オープン戦
5/25.31.6/22 明治大学 他

ラグビー部

第15回東日本大学セブンス 4/13 秩父宮ラグビー場

バドミントン部

関東大学バドミントン春季リーグ
4/26～5/5 日本体育大学 健志台キャンパス 米本記念体育館 他

漕艇部

第36回全日本軽量級選手権大会 5/16～18 戸田ボートコース

※学年は2014年3月現在

ファッション旋風を巻き起こせ！



2006年創部の「RICOCHET」は、年3回のファッションショーが主な活動。「RICOCHET」は、フランス語で水切り遊びという意味で、水切り遊びのようなびよんびよん弾む気持ちをイメージし、子ども心・遊び心を忘れずに、みんなでファッションショーを楽しもうという思いが込められている。

現在、メンバーは、男性5人を含む13人。「洋服を作るのが好き」「アクセサリを作るのが好き」「ファッションに興味があり、服の話がしたい」「ショーを演出するのが好き」と、入部動機は人それぞれ。新人のための「服の縫い方講習会」や、衣装の材料を揃える日暮里繊維街への「買い物ツアー」などがあり、未経験者でも服が作れるようになるが、自分で作らず、既製服をコーディネートしたり、ショーをサポートするメンバーもいる。

基本の活動は、サークルの運営やショーの構成などを話し合う週1回のミーティング。衣装製作は個人で行うことが多いが、ファッションショーの前には、モデルとの打ち合わせやショーの予行練習のために集まる回数がぐっと増える。

1月29日に開催された第20回ファッションショーでは、1「Kimono四季にのせて」2「install」3「fun」4「Binary」

5「2WAY変形する服」と、5つのテーマに分け、30分ほどのステージを披露した。

カジュアルな服もあれば、華やかなドレスも。テーマごとに雰囲気はガラッと変わり、変化に富んだ舞台構成で、観客を飽きさせない。

モデルの多くは、部員の友人関係を駆使して集めた、本学の誇る美女やイケメンたち。予算がない上、ショー当日だけでなく、事前に、舞台でのウォーキング練習や予行練習をする必要があるため、「時間に余裕があり、無報酬で引き受けてくれるモデル」を確保するのは大変だ。しかし、一度ステージに立つと、「普段着られないような服が着られて楽しかった」「ステージを歩くのは楽しかった」と次回からも出てくれる人が多いという。



Information

筑波大学には、約40の文化系サークルが所属する「文化系サークル連合会(文サ連)」と、約30の芸術系サークルが所属する「芸術系サークル連合会(芸サ連)」という、大学公認の学生組織があります。

このコーナーでは、こうした文化系・芸術系サークルによる公演や、学園祭などのイベント情報、各種表彰・コンテスト結果などをお知らせします。(詳細は下記ホームページをご参照ください)

【文化系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

【芸術系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>



「ショーの直前は、服作りに追われて、寝る暇もないほど。しかも、モデルさん探し、ウォーキングの指導、会場準備など、服作り以外の準備も大変です。でも、『みんなで一緒にひとつのステージを作るぞ』と頑張るから、大変でも頑張れるし、ステージが終わるとまた次をやりたくなるんですね。ショーの後は、モデルさんを含めて打ち上げをして、撮影した動画を見ながら盛り上がります」と、部長の松田彩花さん（芸術専門学群2年）。松田さんは、高校生の頃から服作りが趣味だったが、1人で作っているだけでは味わえない、「自分が作ったものが、みんな

に注目されながらステージを歩いている」という感動も醍醐味なのだという。

（第20回ファッションショーの様子は、YouTubeでも公開中。
詳細は<http://ricochettsukuba.blog.fc2.com/blog-entry-643.html>）

同ショーは卒業記念企画。今は新歓祭の準備中で、秋には、学祭でファッションショーを開催する。

筑波大学のファッションリーダーに

ところで、本学は「地味」というイメージがあると言われている。

「東京なら着られるけど、筑波大学では着にくいというような服があります。東

京だったらよくいるけれど、学内でこのファッション性は逆に浮くでしょ、というような…。どんな服でも自由に着られる雰囲気になったらいいな、そして、「RICOCHET」がそれをリードする存在になれたらいいな、と思います」と松田さん。同サークルのホームページでは、学内のおしゃれな学生に声を掛けて撮影した写真を、おしゃれポイントの解説と共に掲載していたが、残念ながら中断している。現在、その企画の再開と、今までのファッションショーで披露してきた服を電子書籍風にまとめることを計画中だ。



新入生歓迎祭

各課外団体がさまざまなパフォーマンスで新歓アピール
4/7～5/30（場所/本学内）

管弦楽団

第75回定期演奏会
5/17（場所/ノバホール）
14:00開演 全席指定1000円

第30回つくば芸術祭

地域の方々との交流を目的とした芸術・文化系サークルのイベント
5/3、4（場所/つくばセンター周辺）

吹奏楽団

第71回定期演奏会
6/14（場所/ノバホール）15:30開演

第40回やどかり祭

学生宿舎を中心に、新入生や地域の方々と親睦を深める祭り
5/30、31

※学年は2014年3月現在



© TURISMO TORINO.
Photo by Giuseppe Bressi



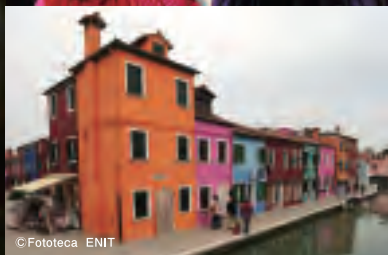
© Fototeca ENIT



© Fototeca ENIT



© Fototeca ENIT



© Fototeca ENIT



ヨーロッパ最古の大学

ボローニャには、1088年に創立されたヨーロッパで一番古い大学、ボローニャ大学があります。とても大規模な大学で、新学期が始まると市の人口は、40万人から50万人に膨れ上がります。

ヨーロッパ中から集まって来る学生に宿舍を提供するため、歩道に張り出すように増築を重ねてきたのがポルチコ（アーケード・写真下段）。市内に全長45キロ以上あり、ボローニャの特徴的な風景を作り出しています。

「大学都市で、ラテン語の難しい言葉が飛び交い、自分は賢いとうぬぼれている」というのが、イタリア人から見たボローニャのイメージのようです。イタリア人が、子どもから大人まで楽しむ「コンメディア・デッラルテ」という仮面即興劇があつて、それぞれの地方を代表するキャラクターが登場するのですが、ボローニャは「うぬぼれ屋」。ちなみに、フィレンツェは「お金持ち」、ヴェネチアは「いつもお金を欲しがっている商人」です。子どもたちが好きなのは、主人公の「アルレッキーノ」で、カーニバルには、アルレッキーノの仮装した子どもがたくさん歩いていきます。

イタリアには、ボローニャより有名な観光地がたくさんありますが、おいしい料理と素敵な建物のあるいい街です。日本からの直行便はないので、オーストリアで、ボローニャ行きの飛行機に乗り換えて行くのが安くてお勧めです。

15世紀の貴族の館で勉強

中学生の頃、日本のアニメやマンガに興味を持ったことをきっかけに、日本の音楽や文化が好きになりました。フィレンツェ大学に進学して英語と日本語を勉強した後、日本語をより勉強するために、語学教育で有名なヴィネシア・カ・フォスカリ大学の大学院に入りました。

イタリアでは、高校が5年、大学3年、大学院2年です。僕は、今大学院の2年生で、交換留学生として、筑波大学に来ています。イタリアの大学は、日本と違い、入るのは難しくありません。専攻は、入ってから自分が好きなものを選びます。でも、入ってからの一つの試験がすごく難しいので、試験の結果が悪い人は、最初の一年で、他の大学に行ったり、専攻を変えたりします。

ヴィネシア・カ・フォスカリ大学には、筑波大学のようなキャンパスはありません。歴史的建造物が多い街で、新しくキャンパスが作れないため、既存の建物の内部を改装して大学の施設にしています。一つ一つがそれほど離れているわけではありませんが、教室や図書室は20〜30カ所に点在しています。僕がよく利用した、東アジア学科の図書室や自習室は、15世紀に建てられたヴェンドラミン・ディ・カルミニという貴族の館にありました。歴史的な建物で勉強するのもいいですよ。筑波大学からたくさんの交換留学生が来ると思います。



フィレンツェ © Fototeca ENIT



ポルチコ © Fototeca ENIT



© Fototeca ENIT



ヴェネツィア サンマルコ寺院 ©Fototeca ENIT

Homeland

本学には、80を超える国から、約2千人の留学生が訪れています。
このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。



イタリア共和国



サルティ・ダヴィデ

Sarti Davide さん

所属:人文・文化学群 日本語・日本文化学類
趣味:マンガを描くこと・読むこと



美食の都、ボローニャ

僕が生まれ育ったボローニャは、「美食の都」、「ヨーロッパ最古の大学がある都市」として知られています。

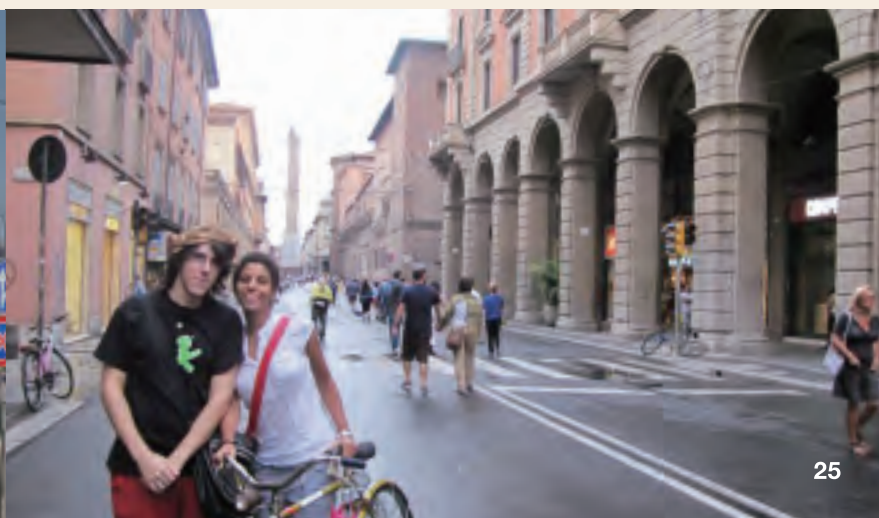
ボローニャの人は、みんな食べることが大好き。みんな知っている「ボローネーゼ・スパゲッティ」(ミートソース・スパゲッティ)は、ボローニャ生まれのパスタです。ボローニャでは、「ラグー・アッラ・ボローネーゼ」と呼び、ボローネーゼ・ソースを幅の広いタリアテッラという手打ちパスタに絡めて食べます。猪の肉で作ると最高ですよ。「ラザニア」もボローニャの料理です。他に僕が大好きなのは「トルテリーニ」。パスタの中に豚肉や玉子などの詰め物を入れたもので、スープに浮かべて食べます。

「ラザニア」や「トルテリーニ」のように手間のかかる料理は作りませんが、簡単なパスタ料理は得意です。イタリアの小・中学校は午前中授業で、昼食は自宅に帰ってから食べます。共稼ぎの家庭が多く、中学生くらいになるとみんな昼食を自分で作るようになります。よく作ったのはカルボナーラ。卵とパンセッタ(生ベーコン)とボローニャ近郊の「パルマ」産パルミジャーノ・レッジャーノチーズ、オリーブオイル、塩・コショウで作ります。10分くらいで作れますが、とてもおいしい。日本では、パンセッタが手に入らないし、パルミジャーノ・レッジャーノチーズも高くて使えないので、しばらく作っていません。

パンセッタやモルタデッラ(ボローニャ・ソーセージ)などの豚肉加工品は、ボローニャの誇る特産品です。



ボローニャの街 ©Fototeca ENIT



地域貢献



アートの力で入院生活に彩りを!

本学の授業ADP(アート・デザイン・プロデュース)の「演習」の一環として2005年に発足した「アスパラガス」。「アートやデザインの力で病院の空気をおいしくする」ことをモットーに、附属病院と筑波メディカルセンター病院で活動しています。

「アスパラガス」が発足して最初に取り組んだのは、附属病院外来棟渡り廊下の改修です。検査機器や不要な家具などが雑然と置いてあった渡り廊下を、窓ガラスに囲まれた明るい空間にし、オリジナルのベンチを並べました。現在は、「アートステーションSOH」と名付けたこのスペースを活動拠点とし

て、院内の環境改善に取り組んだり、さまざまなワークショップやイベントを開催したりしています。

ワークショップで製作するのは、30分以内で作れるごく簡単な作品。健康な人は、やりたいことを選択しながら生活していますが、入院患者さんは、さまざまなことを制限された生活を送っているため、ちょっとした物作りでも、自分らしさを表現する機会を持つことに大きな価値があります。「小さなことでも、すごく喜んでもらえるのは病院だからこそ。病院でやる意味を実感し、やりがいを感じます」とアスパラガス代表・中塚翔子さん(人間総合科学研究科芸術専攻博士前期1年)。指導担当の貝島桃代准教授(芸術系)は、アスパラガスの活動について、「大人になったためらうようなことも、思い切ってやっている。学生だからこそできていることがたくさんあります」と話しました。学生の主体性に任せ、自らは、調整役に徹しています。

アスパラガスを中心としたホスピタルアートの取り組みは、年を追うごとに発展し、新棟「けやき棟」開設時には、建設準備段階から多くの芸術系教員や



いろどりおちょうさんカフェ

布に、スポイトで色水を落として着色し、クリップに付け、ちょうちょの形に切り取って、「おちょうさん」という飾りを作るワークショップ。完成作品を服やカーテンなどに付けることで、自分や周りの環境を彩ることができる。偶然的な模様がちょうちょの模様になるため、年齢や器用さなどに関係なく、誰でも簡単に楽しめる。また、1枚の布から2つの「おちょうさん」ができ、1つは自分用、もう1つはプレゼント用と提案。入院していると、患者から誰かにプレゼントする機会があまりないので、その喜びを患者さんに与えたいという思いが込められている。



街を作ろうワークショップ

昨年12月には、精神神経科からの依頼で、ワークショップを初開催。安全面の配慮などから飾りなどが一切ない精神神経科。手が積極的に動かない患者さんがいることも考慮して、メンバーがマスキングテープで窓に風景を描いておき、そこに患者さんたちと、ゼラチンとグリセリンを混ぜた絵の具で色を塗る手法を考案した。当日は、高校生から40～50代の患者さん約10人と医療スタッフが参加。大好評により、2月には第2回のワークショップ「コップタウンをつくろう」が開催された。

学生が携わりました。現在、アスパラガスをはじめとする病院アートの活動として、アーカイブやプロセスを展示する、附属病院けやき棟開院1周年記念企画「けやきから生まれる命Ⅱ～病院のアートの芽」展を開催しています。(5月30日まで。土・日・祝日は休み)



「SOH」で開催したワークショップ「Co-more-bi」



子どもを守る「おにぎりマシン」の実証実験を実施

子ども安全地域情報共用システムの実用化に向けて、3月8日、李昇姫准教授(芸術系)らが、つくば市の大型商業施設「イーアスつくば」においてウェアラブルデバイス※の実証実験を行いました。

「おにぎりマシン」と名付けたこのデバイスは、総務省のSCOPE(戦略的情報通信研究開発推進制度)プロジェクトに採択され、システム情報系講師の濱中雅俊さんや前医学医療系准教授の岩本義輝さんと共同で開発を進めてきたもの。心拍計、加速度センサー、方位センサー、GPS、カメラ、マイクロコンピュータなどが搭載されています。

実証実験に先だって、同施設内の約

50カ所に設置した送受信機器から、「おにぎりマシン」を装着した子どもの位置や、エスカレーターに乗った・走っている・転んだというような動きなどのデータ、映像を本学のサーバに送信。保護者は、このサーバにアクセスすることで、子どものさまざまな情報を確認することができるというシステムです。

また、迷子と認識された子どものデバイスは、緑のランプが赤いランプの点滅に変わり、周囲の大人に、迷子であることを知らせる機能もあります。

「おにぎりマシン」は、3本のベルトによって服の上から装着するウェアラブルデバイスで、子どもが喜んでつけるデザインで

あることが特長。子どもにできるだけ負担がかからないように、軽量化の工夫を重ね、約70gを実現しています。

実験は、「ママまつりinつくば」というイベントの一環として行われ、当日は朝から、実験への参加を希望する親子連れの行列ができました。子どもたちは、おもちゃ感覚で嬉しそうに身に付け、保護者からは、「早く実用化してほしい」という声が多く寄せられました。

実用化に向けては、大型商業施設や保育施設での利用だけでなく、徘徊する高齢者の保護用などへの利用も期待されています。

※ウェアラブルデバイス=身に付けて利用するコンピューターデバイス



永田学長が安倍内閣総理大臣のアフリカ訪問経済ミッションに参加



安倍総理と昼食会（モザンビーク）

永田恭介学長は1月9日～14日の日程で、安倍晋三内閣総理大臣のアフリカ3ヶ国（コートジボワール、モザンビーク、エチオピア）訪問に同行する経済ミッションに我が国の教育・学界代表として参加しました。経済ミッションには、企業から加瀬豊双日会長（経団連サブサハラ地域委員会委員長）はじめ25社の代表取締役会長・社長、国際協力機関から田中明彦国際協力機構（JICA）理事長ら6機関

の理事長等が参加し、本学からは、池田潤学長補佐室長、秋山和男国際部長が学長に同行しました。



エチオピア拡大首脳会談

平成25年度第2回NBC災害・テロ対策研修を筑波大学附属病院で実施

1月23～25日の3日間、厚生労働省から委託された日本中毒情報センターが、筑波大学附属病院の協力で、けやきプラザをメイン会場に、平成25年度第2回NBC災害・テロ対策研修を実施しました。

NBC災害とはNuclear, Biological, Chemicalによる特殊災害のことで、本研修はテロのみならず人為災害や自然災害により被災した患者の受入れや、派遣する医療機関支援チームの要員の育成を目的としています。

今回の訓練に、全国から15施設、計75人が参加しました。

本院からは、救急・集中治療部水谷太郎教授が講師として、NBC災害・テロ発生時に対応する可能性が高い、救急・集中治療部の医師、看護師、放射線技師、臨床工学技士が受講者として参加しました。5人はいずれも本院の災害派遣医療チーム「DMAT」のメンバーです。



総合演習実技訓練の様子



つくば市消防本部署員による化学車の装備等の説明

第3回BAMIS国際フォーラムを開催

3月1日、筑波大学東京キャンパスにおいて「第3回BAMIS国際フォーラム(筑波大学開学40+101周年記念事業)」を開催しました。

身心統合スポーツ科学 (Body and Mind Integrated Science: BAMIS) プロジェクト (文部科学省概算要求特別経費、中心研究者：征矢英昭教授・体育系) では、心・技・体をトータルに捉え、人々が「活力」や「しなやかさ」を備えた身体と心を持つために、運動がいかんして貢献するかを科学的に研究してきてお

り、その一環として本フォーラムが開催されました。

国内・国外の大学や企業の関係者約180人が来場され、会場では、身心統合の重要性やプロジェクトで得られた研究成果について多くの議論がなされました。



フォーラムでの講演の様子



シンポジウム出席者による集合写真

受賞 Awards and Prizes



平成25年度文部科学大臣 優秀教職員表彰

山本晃教務主任(附属聴覚特別支援学校)が、平成25年度文部科学大臣優秀教職員表彰に選ばれました。この表彰は、全国の国公私立学校の現職の教職員(教職員経験10年以上かつ原則として50歳未満の者で管理職を除く)で、学校教育における実践等で特に顕著な成果をあげたとして推薦された教職員について、文部科学省が審査を行い、決定されるものです。

山本教務主任は、日記文、作文、副詞指導に関する実践研究のほか、授業中の発問等を利用した家庭学習教材の作成、言葉の指導法『お天気メソッド』を研究テーマに掲げ、多くの成果を上げてきました。中でも『お天気メソッド』は、日々の天気予報で使われるさまざまな日本語を題材にした点で高く評価されました。平成22年日本教育公務員弘済会本部奨励研究に選ばれた後、平成25年第3回気象文化大賞も授与されました。

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
米国セラミックス学会 顕微鏡写真展 光学顕微鏡部門1位	鈴木義和准教授(数理物質系)	_____
国際トラウマティックストレス学会 フランクオックバーク賞2013年受賞	松井豊教授(人間系)	_____
エヌエフ基金・第2回(2013年度)研究開発奨励賞 優秀賞	中山知紀助教(システム情報系)	_____
平成25年度コニカミノルタ画像科学奨励賞 優秀賞	加納英明准教授(数理物質系)	_____
第4回都市調査研究グランプリ最優秀賞	鈴木勉教授(システム情報系) (鈴木勉研究室と常総市との共同研究)	_____
SATテクノロジーショーケース2014 ベスト・プレゼンテーション賞:総合得点賞	大城幸雄講師(医学医療系)	_____
	本多隆利 (グローバル教育院 ヒューマンバイオロジー学位プログラム 一貫制博士1年)	古久保-徳永克男教授(生命環境系)
SATテクノロジーショーケース2014 ベスト研究交流賞	新井香裕(理工学群 工学システム学類4年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系)
日本宇宙生物科学会 第27回大会 優秀発表賞	木村駿太(生命環境学群 生物資源学類4年)	横谷(富田)香織講師(生命環境系)
第2回ナノ・マイクロ構造デザイン国際ワークショップ 優秀発表賞	愛須一史(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期2年)	鈴木義和准教授(数理物質系)
See-D Contest 2013 優秀賞 The 12th NTU-Japan International Student Symposium on Life Sciences 最優秀賞(口頭発表部門第一位)	本多隆利 (グローバル教育院 ヒューマンバイオロジー学位プログラム 一貫制博士1年)	古久保-徳永克男教授(生命環境系)
第8回日本統計学会春季集会優秀発表賞	石井晶(数理物質科学研究科 数学専攻 博士前期課程2年)	青嶋誠教授(数理物質系)

※所属、職名、学年は受賞時

システム情報エリア支援室
杉野谷翠さん

音楽を聴くことが好きで、子どもが産まれる前は主人と月に1回はライブに行っていました。特にパンクやロックの類が好きで、今は通勤中の車の中で大きな音で聴きながら歌い、時には頭を振り、体を揺らし、ライブに行った気分を味わっています。対向車や横を走る車から見れば、ただの危ない女です。もし見かけても見ないふりをしてください。そんな母のDNAをしっかりと受け継いだ娘たちも、今はとある海外のバンドがお気に入り、後部座席で歌い叫ぶ日々を送っています。近い将来、家族でライブに行くことが今の私の楽しみです。



今回は、システム情報系准教授の山際伸一さんです。
「広い知識と語術をお持ちで、特に高知ネタを楽しく聞かせていただいています。お花見BBQしましょうね！」

国際部留学生交流課
関本啓子さん

職場では、子どもと同年代の留学生の受入支援を行っていますが、週末には、息子の野球の応援で忙しく過ごしています。子どもたちが一生懸命頑張っている姿を見ていると、仕事の悩み等を忘れることができ、ありがたいことにストレス発散のいい機会となっています。一緒に応援するママ友達との楽しい会話も私にとって大切な時間です。話に夢中になるあまり、「今の試合、どっちが勝った？点数は？」なんてこともしばしばです。間もなく中学最後の総体に臨む子どもたち。悔いのないよう一戦一戦全力でプレーし、少しでも高みを目指して取り組んでくれることを願っています。頑張れ、中学球児！



今回は、医学医療系准教授の宮増フラミアさんです。
「同時期に母親になり、それ以来、子育ての相談などママ友としてもお付き合いいただいています」

リ シ ー エ ッ セ イ

>>>

人文社会エリア支援室
生井栄さん

教職員のコミュニケーションを図るため創刊された「ツクコム」も23号を迎え、創刊に携わった者としては感慨深いものがあります。第8号の企画では、本学のブランディングに関する座談会に参加する幸運に恵まれました。今ではITF旗もメッセージソングも当たり前になりましたが、当時はIMAGINE THE FUTURE.をいかに馴染ませるか苦慮しました。当時の山田学長や考案者の一倉宏さんなどとのやり取りが懐かしく思い返されます。「ツクコム」はデザインも洗練され、本学を代表するものとなりました。これからも皆さんから愛される広報誌を目指してください。私も、再び編集に携われる日を夢見しています。



今回は、総務部職員課の胡美穂さんです。
「誰もが羨む魅力的な笑顔の持ち主で、たくさんのファンがいます」

人文社会系准教授
五十嵐沙千子さん

ガソリンが満タンで空が青く晴れていたらそれだけで嬉しい。休日ならなお嬉しい。どこに行くというのでもないが、その「どこに行く」というのがないことが一層嬉しい。行き先のないこと、それが「どこか」であって「どこ」でもないことが嬉しい。目的もなくただ走ること、道路と一体になってさまざまな点在する他の車や路面の変化を感じながら、道路の全体をまるでそれが大きな一匹のうねる竜のように感じながら加速と減速を繰り返して美しく走ること、ただ走るということ、そのことが嬉しい。ショパンもデイスカッションも授業も車も、一つになって今流れていくということが大好き。前世はきっと川だったのかな。



今回は、学生部学生生活課の貝瀬隆拓さんです。
「私を強力にサポートしてくれる学生生活課の職員の方々に」とても感謝しています。で、仲良くなれて嬉しいです♡」

附属小学校教諭
平野次郎さん



この仕事では、「趣味は何ですか?」と聞かれることが多い。「野球・鉄道・ピアノ演奏」と答えるのだが、小学生の頃から変わっていない。今年初め、大学時代の音楽仲間への呼び掛けにより、都内で演奏する機会を得た。共演する仲間は、ジャズ界で活躍するプロのミュージシャン。そして大学時代の師匠も共演するというおまけつき。本番前に緊張しないはずはないのだが、演奏が始まると落ち着いた。共に奏でる仲間がいることが何よりも嬉しい。演奏技術では到底かなわないが、音楽は心で通じ合うことができる。野球や鉄道を通して子どもたちとつながることも多い。そのネタ集めに必死になる今日この頃である。

今回は、附属大塚特別支援学校教諭の高津梓さんです。
「懇親会で私を紹介してくださった嶋先生と3人で一緒にしました。
今後も同期の絆を深めたいと思っています」

附属図書館情報サービス課
渡邊朋子さん



静岡県の掛川花鳥園に行ってきました。…楽園でした。極彩色のインコや黄色いクチバシのオオハシなど珍しい鳥に触り放題。ペンギンも抱っこできます。大好きなフクロウも、手のひらサイズから、翼を広げると1メートル超えの大作まで、幅広く揃っていました。写真は鷹匠体験(フクロウ)です。こんなにかわいいのに猛禽類なので、皮手袋を付けて手乗りさせます。羽がふわふわのもふもふで、触り心地が最高!大満足の休日でした。ペットは飼えないけれど、小さな生き物に癒されたい方は、つくばにもフクロウカフェや「つくばわんわんランド」(猫もいます!)があるので、お薦めです。

今回は、総務部職員課の中西直子さんです。
「おっとり笑顔が素敵な10年来の友人です。会話のセンスがある方で、おしゃべりしていると時間を忘れます」

T S U K U B A C O M M U N I C A T I O N

生命環境系教授
菅平高原実験センター
町田龍一郎さん



数年前、息子が飛行機プラモデルの食玩(メインは「付録」の玩具で、お菓子がまさに「付録」)を買ってきました。その飛行機は1/144の日本海軍機で、なかなかよく出来ていました。子供の頃、夢中になって飛行機のプラモデルを作っていたことを思い出し、食玩の日本海軍機集めにはまってしまいました。中途半端に凝り性な私は、資料を調べてペインティング、私の1/144スケールの「日本海軍航空隊」(「零戦」だと長6cmちょっと)は現在250機ほどになっています。菅平高原実験センターで昆虫の研究と教育活動をしています。写真は留学生プログラムでの記念撮影、前列左が私です。

今回は、医学医療系講師の石川正憲さんです。
「留学生プログラムと一緒にやらせていただいている、すごく真面目で面白すぎる先生です」

国際部国際企画課
田中慶さん



ギターを弾くのが好きです。エレクトリックもアコースティックも、いまだお遊びの域を出ないのですが…。遊びというのは、特定の目的や方向をもたない概念なのだと思います。それでも敢えて、この趣味に目的や方向を見とすれば、自分の気持ちにネジを巻くような意味合いがあるのかなと思います。和音に1音足し引きするだけで、響く印象が全く変わってしまうように、弾く曲に応じて気分までメジャーにもマイナーにも振れていく感覚。些細なきっかけで気持ちは切り替えられるし、見方は変わるものだと実感されます。そうやって自分自身をチューニングするようにして、ギターを弾くことを楽しいと感じています。

今回は、図書館情報エリア支援室の西島悠策さんです。
「頼れる同期のお兄さんです。気さくな人柄と抜群のプレゼン力で、初年度研修では幾度となく助けられました」

※所属、職名は2014年3月現在



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

[茗溪会とは] 一般社団法人茗溪会(江田昌佑理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする社団法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪会顕彰《茗溪賞》平成25年度受賞者

茗溪会の顕彰事業として三分野における活動に「茗溪賞」を贈っています。そのうち、一般社会人対象の顕彰については前号でお知らせしましたが、本学の卒業・修了学生対象の二つの茗溪賞がこのほど決まりました。一つは、大学院生の社会貢献活動に対して贈るもので、もう一つは芸術専門学群の学生および大学院生の優秀作品に贈るものです。それぞれ、各専攻および学群から対象学生を推薦していただき、3月7日の選考委員会(西川潔委員長)で決定し、3月25日の卒業式・学位記授与式において副賞と共に贈られました。

社会貢献活動(大学院生)



羽生一予
「土壌観察会」



渡辺修
こぐま園でのボランティア活動



越部裕子
失語症等に対する相談および訓練



高橋靖彦
第10回世界ラート競技選手権優勝

中村映子(スクールリーダーシップ開発専攻)	小学校におけるアクションリサーチを通じた学級経営改善支援	宮田宣也(生物資源科学専攻)	東日本大震災被害を受けた南三陸町、石巻市雄勝への支援活動
馬場 隆(教科教育専攻)	筑波大学ネットワーク衛星「結」を利用した理科教育の開発	羽生一予(生物圏資源科学専攻)	環境教育における「土壌観察会」の推進(写真)
渡辺 修(特別支援教育専攻)	多様な子ども達に対する継続的なボランティア活動(写真)	住吉美奈子(生命共存科学専攻)	筑波大学におけるアウトリーチ活動およびサイエンスコミュニケーション団体「SCOUT」の学生スタッフとしての活動
王 傲寒(物性・分子工学専攻[前期])	小中高生への理科教育実験啓蒙活動	張 揚(教育基礎学専攻)	つくば市および茨城県における留学生交流の促進
金 兌現(物性・分子工学専攻[後期])	筑波大学の国際・国内共同研究への貢献	広瀬拓海(心理専攻)	子どもの放課後の活動を支援する団体におけるボランティア活動
盆子原 歩(社会システム工学専攻)	福島県・茨城県における震災復興支援と高大連携およびアカデミックアライアンス連携への貢献	俞 善英(心理学専攻)	消防職員の惨事ストレスに関する研究・ケア活動の支援
YAN ARYANTO(経営・政策科学専攻)	経営・政策科学専攻における国際コミュニケーションの推進活動	笠原桂子(生涯発達科学専攻)	聴覚障害者等の安定就労・職域拡大・能力開発・情報保障に関する支援
吉井 淳(社会システム・マネジメント専攻)	米軍基地/ハイスクール等との高大連携および産学連携への貢献	堀内泰利(生涯発達科学専攻)	筑波大学大学院カウンセリングコース・キャリア・プロジェクト(略称:TCCP)を通じた中小企業で働く人へのキャリア支援
川瀬雅士(リスク工学専攻)	カンボジア シェムリアップ トンレップ村の学校における教育活動	松田智行(ヒューマン・ケア科学専攻)	絆がみえるまちづくりの創設ーつくば市地域診断に基づく高齢者地域包括ケアネットワークづくりー
安立隆陽(知能機能システム専攻[前期])	知能機能システム専攻における博士学生会運営委員会としての活動および大学院生としての広報活動	越部裕子(感性認知科学専攻)	筑波大学心理・障害相談室等における失語症等に対する相談および訓練の実施(写真)
小林 透(知能機能システム専攻[後期])	筑波大学での研究活動により培った専門性・コミュニケーション能力を活かしたアウトリーチ活動	高橋靖彦(体育学専攻)	第10回世界ラート競技選手権における日本人初の男子個人総合優勝(写真)
鈴木あゆみ(構造エネルギー工学専攻)	協定校での短期留学経験を生かした留学生支援活動および障害者支援活動の実施	市川寛也(芸術専攻)	アートプロジェクト「隅田川妖怪絵巻」の実施
Martin Miguel Casco-Robles(生物科学専攻)	イモリ体再生メカニズム解明のための高効率な遺伝子改変技術の確立と普及	村野亜子(図書館情報メディア専攻)	研究活動に基づく子どもと読書に関する研究成果の情報発信ー「図書館総合展」および「ニコニコ学会βデータ研究会」での発表ー

芸術活動(芸術学群生/大学院生)



笹岡るり(人間総合科学研究科前期芸術専攻)
洋画「呼応する記憶」



福山菜穂子(芸術専門学群)
クラフト領域「ある日のこと」



竹中大悟(芸術専門学群)
彫塑「Il mare」(いる まーれ)



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔紫峰会とは〕 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそこで父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

紫峰会援助金と学生財務会議

課外活動への財政支援は、紫峰会の活動の原点であり最も力を入れている事業です。

○学生財務会議

団体やイベントからの援助金申請は、すべて学生財務会議で審議されます。学生財務会議は紫峰会援助金規定に基づき、三系財務局長および全代会担当者により構成されています。学生同士の折衝を経て援助額や配分基準が作成されるという学生の自治を象徴するユニークなシステムであり、30年以上続いています。

①課外活動団体援助金（H26予算額1,600万円）

サークルの日常活動に対して支給しており、三系に加盟する150の課外活動団体が対象です。各団体の会計担当者が各系財務局に提出した収支計算書の金額などを参考に援助金額が算出されます。各団体への支給金額は最終的に、系ごとの責任者会議にて決定されますが、会計担当者が熱心に取り組んでいる団体には、援助金が多く支給される傾向があります。

②特別援助金（H26予算額250万円）

国際交流、地域交流、社会貢献活動を促進することを目的とした援助金で、海外遠征や周年記念事業、大規模な公演やボランティアイベントなどが対象です。

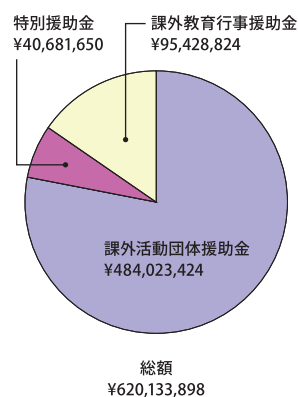
③課外教育行事援助金（H26予算額405万円）

学内の公式行事などが対象となる援助金で、学園祭、スポーツ・デー、宿舍祭、つくば芸術祭、新歓祭、課外活動団体リーダー研修会などに支給されています。

④記念品特別支給（H26予算額10万円）

課外活動団体が海外遠征や国際試合に参加する時に、紫峰会が制作している「UTコレクション」を支給し、国際交流に活用してもらっています。

過去37年間の援助金支給実績



映画『阿賀に生きる』上映会

大田 隆之(比較文化学類 4年)

1月25日、筑波大学でドキュメンタリー映画『阿賀に生きる』（1992）の16ミリフィルム上映会を開催し、学生教職員だけでなく一般からも多くのご来場をいただきました。

『阿賀に生きる』は、新潟水俣病の発祥地である阿賀野川流域に暮らす人々を3年間にわたって撮影した映画です。(故)佐藤真監督は、水俣病の悲惨さや訴訟ばかりを前面に押し出すメディアの表層的な捉え方に対し批判的で、この映画では普段見落とされがちな患者の日常、にあえて目を向けています。未認定患者の老人たちが稲刈りや鮎漁、船造りをする姿は美しく、また酒に酔う姿や夫婦喧嘩は面白おかしく滑稽なのですが、そんな日常の風景の中にさりげなく挟み込まれる彼らの震える手や、感覚障害のために火傷を負った足の映像には、水俣病を暮らしの一部として抱え込んでしまった人々への、単なる憐憫を超えた共感が伴っています。

今回はゲストとして、映画の撮影をされた小林茂さん(59)と、映画の制作発起人であり現在も地元で患者の支援活動が続けている旗野秀人さん(64)を新潟からお招きし、上映後に来場者からの質問に答えていただきました。皆お二人の実感のこもった話に引き込まれ、時間はあっという間に過ぎました。

上映会は比較文化学類の後援事業であり、ViCC 映画を作る会との共同開催でした。また現役筑波大生である佐藤監督の御嬢さんにも運営に参加して頂きました。T-ACTにはチラシの印刷など物的支援を、紫峰会には特別援助金の支給と運営面での

アドバイスをいただきました。個人的な興味からスタートしたプロジェクトでしたが、多くの皆さんの協力を得て上映会を実現でき、本当に感謝しています。



Media Appearances

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(2014年1月～3月)

新聞記事一覧

	記 事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	真田久体育専門学群長が、2020年の東京五輪・パラリンピック開催について語る	真田久体育専門学群長(体育系)	毎日(1.1)
2	朝田隆教授を代表とする研究チームは、2014年度より、全国の高齢者約1万人を4年間追跡する大規模調査に着手	朝田隆教授(医学医療系)	毎日(1.1)
3	つくば国際戦略総合特区3年目。2014年は、BNCT装置稼働、藻類バイオマス屋外実証プラント完成など重要な節目の年に	渡邊信教授(生命環境系) 熊田博明准教授(医学医療系 陽子線医学利用研究センター) 山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長) 中村道治機構長(つくばグローバル・イノベーション推進機構長) サイバーダイナ	茨城(1.3)
4	▽進化論:トップ選手の動きを分析し、新しいトレーニング方法や理想的な走法を 探求する科学的研究(バイオメカニクス)が進んでいる	阿江通良副学長	東京(1.7)
5	矢作直也准教授らは、東京と徳島で、薬局での簡単な血液検査で潜在的な 糖尿病患者のチェックする社会実験を続けている	矢作直也准教授(医学医療系)	毎日(1.9)
6	千葉滋教授らは、悪性リンパ腫の一種「末梢性T細胞リンパ腫」は、 RHOA遺伝子に変異が起きていることを解明	千葉滋教授(医学医療系)	茨城・日本経済・日刊工業(1.13) 産経(1.21)
7	「筑波大学・アジア太平洋経済協力(APEC)国際会議」で、 数学・理科、英語教育の改善を先導する共同研究を計画	附属小学校	日本教育新聞(1.13)
8	澁谷彰教授らの研究グループは、抗生物質でぜんそくが悪化する仕組みを解明	澁谷彰教授(医学医療系)	朝日・日本経済・日刊工業・ 日経産業(1.16)産経(1.17) 毎日(1.20)読売(2.6)
9	本学は、「国際バカロレア」を取得した受験生を対象に、 2015年度入試から学科試験免除の特別入試を全学部で実施すると発表		読売(1.16)
10	附属病院は、極低体重児の段階的な心臓修復手術に成功	平松祐司教授(医学医療系)	朝日・読売・日本経済・産経(1.18) 東京(1.18, 7.19)
11	サッカー全日本大学女子選手権で本学が準優勝	女子サッカー部	朝日・茨城・毎日・読売・東京(1.20)
12	高橋智教授らの研究チームが、動脈硬化を悪化させるたんぱく質を発見	高橋智教授(医学医療系 生命科学動物資源センター長)	毎日・日本経済(1.21)産経(1.23)
13	サッカーJリーグ 鹿島アントラーズの新戦力、FW赤崎秀平の決意	赤崎秀平(体育専門学群4年)	朝日・茨城(1.21)
14	ソチ冬季五輪に、福田崇助教がスピードスケート日本代表のトレーナーとして帯同	福田崇助教(体育系)	茨城(1.22)読売(2.7)
15	福岡堅樹、山沢拓也ら、ラグビーの全国大学選手権大会で、 2019年W杯日本大会で活躍しそうな若手の逸材が活躍	福岡堅樹(情報科学類2年) 山沢拓也(体育専門学群1年)	読売(1.21)
16	金信弘教授らの研究チームは、宇宙線で原発内の可視化に成功	金信弘教授(数理工学系)	茨城・毎日・朝日・ 日本経済・産経・日経産業・ フジサンケイビジネスアイ(1.24)
17	震災後の芸術を全国に発信するため、福島県の鬼伝説を舞台化。主役は、平山素子准教授	平山素子准教授(体育系)	東京(1.28)
18	ダイヤモンドを用いて量子コンピューターの実現に不可欠な量子エラー訂正に成功	磯谷順一名誉教授	日経産業(1.30)毎日(2.6)
19	▽探求人:花粉を受粉させなくてもしっかりと実をつけるトマトを開発した江面浩教授の話	江面浩教授(生命環境系 遺伝子実験センター)	朝日(1.30)
20	システム開発のベンギンシステムが、西嶋尚彦教授と、タブレット端末向けの動作習得支援アプリを共同開発	西嶋尚彦教授(体育系)	茨城(1.30)
21	林純一教授の研究グループが、ミトコンドリア病の予防技術を開発	林純一教授(生命環境系)	日本経済・茨城(2.4)読売(2.12)
22	本学大学院が、2014年度から、助産師の国家資格取得を前提とした専門コースを新設	江守陽子教授(医学医療系)	読売(2.8)
23	細胞性粘菌の波が、衝突しても互いにすり抜けることを世界で初めて確認	桑山秀一准教授(生命環境系)	読売(2.9)
24	中谷敬准教授らのグループが、昆虫の性フェロモンに反応する「人口細胞センサー」を開発	中谷敬准教授(生命環境系)	日刊工業(2.10)
25	本学創造的復興プロジェクトで、学生が被災者に取材して制作した ドキュメンタリー映画「いわきノート」が完成。21日に本学で上映会開催	創造的復興プロジェクト 窪田研二准教授(芸術系) 中川慧介(心理学類4年) 有馬俊(芸術専門学群3年) 岡崎雅(障害科学類2年) 佐々木楓(芸術専門学群2年) 鈴木ゆり(芸術専門学群2年)	読売(2.11)毎日(2.19) 茨城(2.20) 東京(2.20夕, 2.21)
26	▽トップインタビュー:ネットワーク構築のソフトウェアを開発するソフトイサー社長、登大遊さん	登大遊(システム情報工学研究科博士後期1年)	地域(2.16)
27	高谷直樹教授らが、世界最高の耐熱性能を持つバイオ・ポリイミド樹脂を開発	高谷直樹教授(生命環境系)	日刊工業(2.18)
28	本学は、篤志家夫婦からの5億円の寄付を用いて、「自然保護寄付講座」を本年4月に開講すると発表	吉田正人教授(芸術系)	読売(2.28)
29	本学が開発した小型人工衛星「結」を搭載したH2Aロケット、打ち上げ成功	亀田敏弘准教授(システム情報系) 藤原綾香(人文学類2年) 前田詩帆(生物資源学類1年)	茨城(3.1)朝日(2.28夕, 3.1) 毎日(2.28夕, 3.3)読売(3.1)
30	石田健一郎教授らが、アメーバの一種が透明なガラス質の殻を作る様子を動画撮影することに成功	石田健一郎教授(生命環境系)	朝日(3.5)夕
31	競泳短水路の関東学生冬季公認記録会の男子200メートルメドレーリレーで、 本学の金子雅紀・林佑樹・佐藤智俊・鏡味卓也が1分35秒55の日本新記録を樹立	金子雅紀(体育専門学群4年) 林佑樹(同4年) 佐藤智俊(同4年) 鏡味卓也(同3年)	東京(3.10)夕
32	離れたところにいる子どもの状態を把握できる装置「おにぎりマシン」を 李昇姫准教授と濱中雅俊講師らが開発	李昇姫准教授(芸術系) 濱中雅俊講師(システム情報系)	読売(3.15)
32	松山茂講師らが、アリの情報伝達タンパク質発見。環境に優しい農業開発につながると期待されている	松山茂講師(生命環境系)	産経(3.15)

テレビ放送一覧

	内 容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	ロボットスーツHALを開発した山海嘉之教授の研究者としての姿を追うドキュメンタリー	山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長)	NHK総合 「プロフェッショナル 仕事の流儀」(1.20)
2	柳沢正史教授の睡眠のメカニズムに迫る研究内容を紹介し、研究に向かう姿勢に密着	柳沢正史教授(国際統合睡眠医学科学研究機構長)	TBS 「夢の扉+」(3.2)

※所属、職名、学年は2014年3月現在

Event calendar

4 april

1日(火) 春季休業(～6日)
交差する表現—構成専攻の現在展
(芸術系ギャラリー、大学会館アトスペース)
(～6/1)

7日(月) 入学式
理療科教員養成施設入学式
附属桐が丘特別支援学校入学式

8日(火) 新入生履修ガイダンス
附属小学校入学式
附属中学校入学式
附属聴覚特別支援学校入学式

9日(水) 新入生オリエンテーション(～10日)
附属駒場中学校入学式
附属高等学校入学式
附属駒場高等学校入学式
附属坂戸高等学校入学式
附属視覚特別支援学校入学式
附属大塚特別支援学校入学式
附属久里浜特別支援学校入学式

10日(木) 新入生オリエンテーション(～11日)

11日(金) 春学期授業開始

19日(土) 科学技術週間「キッズユニバーシティ」
自然保護寄附講座開講記念シンポジウム

26日(土) 交差する表現—構成専攻の現在展
(総合交流会館)(～5/11)

5 may

17日(土) 春季スポーツ・デー(～18日)

18日(日) 筑波大学みどり散歩(国際植物の日)

30日(金) 第40回 やどかり祭(～31日)

6 june

25日(水) 春ABモジュール期末試験(～7/1)





筑波大学
University of Tsukuba